

---

# 気だるい毎日

宙華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気だるい毎日

### 【Nコード】

N6606C

### 【作者名】

宙華

### 【あらすじ】

ある女子高生『竜祖紗鶴<sup>りゅうそさかく</sup>』の話。かなりダークです。なお登場人物は紗鶴を除いて毎話別人です。

友人って何？＋イライラしている

いつも通り、私は一人で机に座って本を読んでいた。  
それは『変わった人』と言うタイトルで、

まるで私の事ではないか、と興味が出たので手に取ったのだ。

長い間、少女は周囲から孤立していた。

その存在は認められておらず、

たまに彼女の存在に気付いた者からは、

必ずと言っていいほど憎悪の目と、力と言葉の暴力を受けるので、  
少女は絶えず周囲の視線を気にし、怯えており、

ごくごく稀に、気まぐれに差し延べられる手にすがっていた。

それは苦しく惨めな思い出だった。

しかし少女から娘へ、

そして女に成長した時、彼女は自分が不快と思う事をする相手に対し、

はつきりと怒りの感情を現にする事を覚えた。

最初はそれが楽しく嬉しかった。

特に周囲と自分の立場があっけなく入れ代わった時には、

『何故、早くこうしなかったのか』

と激しい後悔に襲われ、自らに怒りを覚えたりもした。

しかし困った事に、

彼女は怒りをどこまで現しているのか、どこで抑えるべきかが分からなかった。

気がつく、誰かが少しでも気に入らない言動をしようものなら、  
どんな相手でも容赦なく徹底的に叩き潰し、

廃人同然に追い込まないと気が済まなくなっていた。

これはいけない事だと気付いていた。

かつて自分を追い込んだ悪い人間と同じ事をしている。

彼女は、そう言う悪い人間は嫌いだった。

『私は悪い人間のように悪い事をしない。私は悪い人間とは違う』  
常にそう思い続けていた筈なのに。

そして、ついに彼女は気付いた。

自分は変わってしまったと。

醜い別の生き物になってしまったと。

そこまで読んだ時、突然予州よしゅうがやって来てこう言った。

「竜祖、バーカ、デーブ、ぶりっ子、死ね」

ちようど自殺を考えていたが実行する勇気がなかった私は、  
こりゃ好都合だなと笑顔で答えた。

「じゃあさ、殺してよ。」

私、遺書にあんたに殺されても罪に問わないって書くからさ  
予州よしゅうは

「キモッ」

と呟いて、こちらの様子を伺っていた仲間達の元に帰って行った。

私は気にせず次話「上の人」に進む。

夢霞ゆめかはだるそうに目を細めた。

街頭に設置されたテレビ画面には選挙結果が映し出されている。

当選した一人の男。かつての同級生が大統領になった。

「獅羽しほが好きだったらごめん。私、あいつ嫌い。普段から口だけだ  
つたし」

夢霞が呟いた。流音るおんが応じる。

「私もー。普段から

『俺に任せときゃ失敗しなかった、もつと上の結果を出せた』

『弱い奴は強い奴に逆らうべきじゃねえ』

が口癖でうざかったもん。それにあいつ戦い好きよ。

戦い好きな人が上にいるとろくなことが無いって歴史が証明してる  
のにねえ」

夢霞は頷いた。

「あいつに票入れた人も頭おかしい気がする。皆が一番望んでる事、

国の独立について一言もどうするか言っていないのによく選べるよね」

「あー思った。TVとかの出演回数で決めてんじゃない？って。年寄りとか特に」

夢霞はそう言って、隣に立つ男に目を留めた。

黒いスーツにサングラス、スーツケースを持っている。

「もしかして投票結果操作されてたりして」

「あ…ああ、有り得る」

夢霞は何か腑に落ちない思いながらも流音の言葉に相槌をうつ。

「それにさー」

『お前達が私を選んだ。だから文句は言うな。選んだ自分達が悪い』

って言うてくると思う。そう言う奴だったもの」

「私もそう思う。不満が出るような事する自分の事棚に上げといてね。」

…まあ、私はあいつ、選んで無いけど」

夢霞の目は暗い。

「私だって選んで無いよ」

それから二人はその場から立ち去った。

次の日の朝。流音から

『新聞見て！』

とメールが来た。新聞には

『この国の未来を担う人物への懸念』

として、

昨日の、新大統領についての二人の会話が一言一句間違わずに掲載されていた。

こんな世の中になつたら誰も悪口言わなくなるかな、と考えていた  
ら、

「どうだったどうだったー？」

「やっぱりあいつ、おかしくてキモかった」

こんな会話が聞こえて来た。それから数日後の、ある日の放課後の  
教室で、

私は友人翔美、公古とジュースを飲みながら話しをしていた。

そこへ友人盤戸がひどくイライラした様子で教室に入つて来た。  
入つて来るなり

「あ、ジューズ？ちよつと飲ませて」

と言つたので

「はい」

と渡すと、利華は少し口をつけて何も言わず返して来た。

「疲れてる？」

私が話し掛けると利華はギロツと私を睨んだ。

「話し掛けないでよイライラするから」

この返事に少しムツとする。

「何なのあんた」

「話し掛けないでつつつてんでしょイライラするから」

「……」

今は何を言つても無駄だと判断し、

他の友人達と一緒に無言でその場から退散した。

私には、どっちが腐っているのか分からない

「竜祖さあ、あんな目に遇っててよく学校に来れるよね。本当、感心する」

クラスメイトの利華りかがそう言った。私は気にせず読書りくを続けた。今読んでいるのは「夢遊バス」と言う都市伝説にまつわるものだった。

表紙にはおどろおどろしい文字で「バスが通っているのは道路だけではない」と書かれている。

遊原素巳ゆうはらもとみはバスの中にいた。

どこに向かっているかは分からない。気がついたらバスの中だった。隣の窓際の席に30くらいの、見知らぬ男が座っていて話しかけてきた。

「お嬢さん、どうやってこのバスに？」

「さあ」

そっけなく言って、素巳は席を移動しようとした。が、立つ前に男に止められた。

「今席を立つのは危ないですよ」

「は？」

「上を見て下さい」

男が上を指差した。バスに天井は無く、代わりに夕焼け空が見えた。その空を、目だけが異様に光っている、黒く大きい奇妙な塊が幾つも飛び交っていた。

その内の何匹かが素巳を凝視していた。

「ひっ…なに、何なのよあれ！」

「私も詳しい事は知りません。」

不思議と、大人しく座ってる人には手を出さないんですよ。

ただ、席を立つたら最後、捕まってしまうよ。

もう少しであれがいなくなりますから、それまで辛抱して下さい」  
素巳は困惑して呟いた。

「何よ、何なのよお…どうなってんの…」

男が素巳の顔をまじまじと見つめて来た。

「何」

素巳の鋭い視線を受けて男は無表情のまま抑揚の無い声で言った。

「きつと、墮ろされた子つて、今の貴女みたいな気持ちなんじゃないかな」

素巳は腹が立った。この男、何が言いたいのだろう。

「母親のお腹の中にいたはずなのに、気がついたら知らない場所にいる。」

「いや、元いた場所に戻ってきたと言った方がいいから少し違うか

…」

男が言葉を続けた。

「身に覚えは？」

素巳は顔を歪めた。

「それが何？そんなの皆やってるじゃん」

ひじ掛けをバンと叩き、男を睨み付けた。男の何もかもが腹立たしい。

男は相変わらず表情一つ変えずに言った。

「生まれていたら、男の子だった筈です」

素巳は言葉を失った。男は素巳から視線を外し、目を閉じながら言った。

「彼に会ったんですよ」

脳裏に浮かぶ、この世に出て来る筈の命。男は暗く、温かい空間に浮いていた。

所々に一抱え程の光があつて、かすかに揺らいでいた。

男は辺りを見回すと、泳ぐように一つの光に近づき、そっと抱えた。

『君だ…』



男は目を閉じ、光に耳を寄せた。

あどけない少年の声がかすかに聞こえた気がした。  
なぜ？どうして？

『君に会いたかったんだ』

わけのわからない記憶や感情のようなものが唐突に頭の中に流れ込んで来て、男は困惑した。

そしてふと、自分が今生活している現実世界を懐かしく思った。

『そうか…君は最初からここにいたわけではないんだね』

静かで温かく居心地がよい。突然の誰かの不安と憎しみ。いらなくなる絶望。

鋭い何かが体のあちこちを切り裂き奪って行く。

男は恐怖のあまり悲鳴を上げ、暴れた。体が闇に溶けて行く。

『両親がこの子を拒絶したか…』

目が開けられない、暗闇のせいで自分の体が見つからない。  
なぜ？どうして？

『私は君と違って、ちゃんと生まれる事が出来た。だから身体があるんだよ。』

…今、苦しいかい？』

ひどい孤独感、自分がここにいるのは無意味だと思う、耐え難い孤独感が男を襲う。

前が見えなくなり、やがて男は目を開けた。

怪訝そうな顔をしている素巳を見て頭の中を切り替える。

「ちょっと聞いてんの！？」

利華<sup>りか</sup>が本を取り上げてきた。

「うるさいな…！！」

冒頭に返るが、『あんな目』とは、集団無視だったり、

悪口を言われたりとお決まりの事である。

私は本当に友達だと思っている違うクラスの子達を思い浮かべて

「ああ、別に心配してくれる人達がいるから」

と笑顔で言い返してやった。

すると利華と、利華と一緒にいた紀大きひろの二人は

『はあ？私たち？何か勘違いしてるよ、うざー』

みたいな表情を浮かべて目配せをしていた。私は心の中で

『安心しなよ、間違ってもあんたたちじゃないからサ』

と呟いた。それから本を強引に取り返して、二人を視界から外して続きを読み出した。

「それだけです」

「は？冗談でしょ？」

「本当だとして、会ってみたいとは？」

「思わないね。死んだ子なんか関係無いし」

男が小さい声でよかった、と呟いた。

「何が？」

「私は小さい頃に『命は巡る』と言う言葉を知ってから、それが本当かずっと知りたかった。

でも本気で調べようとは思いませんでした。…妻が妊娠するまではね」

素已に疑問が湧いた。

「妻？あんた人間なの？」

男は頷いた。

「そう見えませんか？大時谷博おおときたにひろと言う名前もあります」

「ふーん」

大時谷博、と言う名前が何故かひっかかる。

「それから？」

「本来人が通ってはいけない道なんです、その道を辿って会って来ました。

今はその帰ります。妻はこの事を知りませんがね」

彼は続けた。

「私の子の意識…命は、あなたが生む事を拒否した子のものでした

よ」

素巳の心の中に何かがこみ上げてくる。

「命は本当に巡るものなんですね」

「何よ…それ？何か証拠でもあんの？」

素巳は男をまじまじと見つめた。

「彼はまだ人間ではありませんから、話す事は出来ません。

ですが、彼があなたのお腹にいた頃の記憶や感覚を感じる事が出来ました。

でも、それは徐々に消えていくようです」

「そう…」

それでこいつ、私を知ってたんだ。

「じきに、彼は命から私達の子になるんです」

男の目に宿る光が和らぐ。

「…僕はそろそろ降りなくてはなりません。

あなたには、あのアナウンスが聞こえますか？」

素巳は耳を澄ました。

「え？何も聞こえないけど」

男は腕を組んで頷いている。

「そうですか。なら、あなたはまだ降りるべきでは無いのでしょうか」  
きょんととして首を傾げる素巳に構わず続ける。

「このバスに乗っている間、

向こうの世界の時間は止まっているのでそこは問題ありませんが…  
聞き逃さないよう気をつける事です」

「え？」

「このバスが最終的にたどり着く先はあちらですから」

男が指差した方を見て、素巳は唾を飲み込んだ。何も無い。  
暗闇だけがぱつくりと口を開けている。

「アナウンスにさえ気をつけていれば、このバスは人であるなら誰でも、

きっかけさえ掴めばいつでも乗れますから色々な人に出会えますし、

貴重な体験も出来ます。最初は戸惑うと思いますが、中々いいものですよ」

男がすつと席を立ち、何と素已の体を通り抜けて通路に出た。

「では、私はこれで」

「ちよつちよつと待って！待ちなさいよ！」

男は振り返り、初めて笑みを見せた。

「さようなら」

次の瞬間、男は姿を消していた。

「もう嫌っ……」

眩きながらふと気付いて窓からバスの外を見た。

すると、男が渦巻く雲の中心へ落下していくのが見えた。

男は落下しながら去って行くバスを見送った。そしてふと、先程の続きを思い出した。

『安心して眠ってなさい。今度はちゃんと人間になれるからね』  
やがて、男は気付いた。

彼の中から元いた場所での記憶や感覚が少しずつ消えて行く。

生まれる前にまた新しく生まれ変わろうとしている。今度は私と妻の子として。

『今、君が宿ってるのは僕の妻だよ。妻も私も君を待ち望んでいた。だから安心しなさい。もう君をここに戻す事はないから』

混乱が無くなって行く。代わりに新しいこの場所への心地よさ。深い安心感。

『嬉しいよ、君とは仲良くなれるだろう』

男は非常に残念だった。もう元の世界へ帰らなければならない。

我が子がこれから肉体を纏い、ある程度まで成長し、

生まれるのを待つばかりになって行く様を観察していたいのに、ここにいては時が流れない。

『早く生まれておいで、待っているから』

言い終わった途端気を失い、あのバスにいた。

夢と異界と現実の狭間を走り続けるバス……。

次に気がつくと、布団で眠っている自分の体が目の前に迫っていた。

「今から配る用紙に記入するように」

先生が教室に入ってきて、プリントを配った。

配られた用紙を見ると、そこにはクラスにいる友人を書けとあった。

私は心の中で焦っていた。

『どうしよう…私に友人なんていたっけ？』

何も書かないのもあれなので、とりあえず喋った事のある数名を書いていた。

前の席の牙武英奈きはたけいなが振り返ってプリントを見て、他の子にこう言った。

「ねえ、この人と私、友達らしいよ」

そう、英奈と喋った事はあった。

「えっそうだったんだー知らなかった」

周りの人間が面白そうに笑う。私もつられて笑った。心の中で

『うん、私ったら何嘘を書いてるんだろうねー』

と思った。その子達に見られてない隙に書いていた名前を全部消し、

代わりに「いません」と書いて白紙で出した。

後日、先生に呼び出されて交友関係について聞かれた。

## テストでありがち風景

今日は初めてのテスト返しの日だ。

「ねえねえ、紗鶴、テストの点数どうだった？」

澤石さわいしが猫なで声で聞いて来た。

ああ、またか。と思う。

テストが返却されてから5度目である。

他人の点数などどうでもいいじゃないか、と考える自分がおかしいのか。

他人の点数に興味は無い。

（実際、自分の点数は聞かれて答えることはあっても、人の話は聞かない）

大体他人の点数を聞きたがる奴と言ったら、点数高い自慢したがりか、

自分より下を見つけない、自分に自信が無い奴しかない。

私みたいなタイプはそういう連中にとっては聞きやすいらしい。

それ以前に、順位や点数も貼り出されていると言っのに。

「……83」

不快感をあらわにしたまま答える。

別に恥ずかしいとも思わないので、聞かれたら答える。

ちなみに学年平均点より少し上である。

私は基本的に平均か平均より多少上の点数しかない。

「私は90点だったんだ」

かく言う澤石は成績優秀である。

「あーよかったねー」

私の返事は棒読みである。

「紗鶴ったら、これ間違えたの？」

嬉々として私のテストの間違った箇所を指指すB。

「あーうん」

「ええ？簡単なのに」

澤石が近くにいた知りたがり仲間、美富利<sup>みどり</sup>の肩を叩いた。

「ねえ、紗鶴ったらこんな問題間違えてるよ」

「へえ？簡単なのにね」

小ばかりにした口調。美富利<sup>みどり</sup>も頭がいいのだ。

「これで美富利が紗鶴より点数下だったら笑えるよね」

「あははっだね！安心しなよ、ちゃんと上だから」

これからテストがあるたび、

こんなのを毎回相手にするのかと思うと、正直死にたくなる。

## 集団無視のかわし方

私は小学校からほぼ集団無視をされ続けだった。  
むしろそれが普通だった。

たまに声をかけられたと思うと、内容はどれも同じような言葉で、しかも他人が言う「悪口・イヤミ」にあたるものなので飽き飽きしていた。

声をかけられるのが嫌いだった。一緒にいるなんてもつてのほか。なので集団無視状態は私にとってとてもリラックス出来る快適なものだ。

だが、利点もあれば欠点もあり。集団で何か「される」事があるのだ。

それはマジックで上履きや机に落書き（私は気にせず「馬鹿、クズ、死ね e t c」と書いてある上履きや机を使っている。

特に上履きなんかは買い直す金が勿体無い）あるいはばい菌扱い、あるいは体育の時間にサッカーやバスケットでわざとぶつかられたりするなど、

まあお決まりの行動だ。

落書きはともかく、直接私に近付いて行われる種類の行動はとても鬱陶しい。

私は常々どうしたらこれを解決できるか考えていた。

そしてとうとう有効な方法を見つけた。

答えは「私以外の他人に矛先を向ける」こと。

その為には「他の人間とにかく声をかけること」である。

他人に声をかけるのは、私にとっては重労働なのだが、

私が受ける集団無視の場合、大体核となる西納<sup>にしのおう</sup>がいて、

その西納の友人（下僕みたいなもんか）伊津美<sup>いづみ</sup>、国妻<sup>くにつま</sup>がいる。

私が今まで観察した限り、きちんと意思統一出来るのは最大でも



3、5、6人までである。

それ以上の人数になると各自が余程強固な絆で結ばれていない限り、完全な意思統一はほぼ出来ない。

私の周りの他人にそんな強固なまとまりなどないように思えた。

特に集団無視なんてのはその気でない人に無理矢理無視を強制する事が多い。

無視する人数が多い程必ず『可哀想』だとか『本当は嫌だけど…』と、変な良心に苛まれているのが一人二人はいる。

特に「優しい」とか「いい子」「お人よし」「大人しい」あたりが狙い目だ。

見つからなければ、あるいは見つける事が出来ないなら

「ねえ」と手当たり次第に声をかけてみよう。

どんなに話し掛けても目を合わせずに無視する賢い奴は除外。

「え？」とか、複雑そうな表情で「あー…」

とか少しでもリアクションを返す奴がいたらそいつに犠牲になってもらおう。

見つけたら「ノート見せて欲しい」でも何でもいいからとにかく会話をする。

次に相手につきまとう。嫌な顔をされてもつきまとうのだ。

連中は無視をする割に隙あらば傷つける材料を探そうと見張っている。

それを逆に利用するのだ。

ちなみに私は「気が弱くて大人しい」莉倫りりんを見つけ、話しかけた。

辛抱強く声をかけると、根負けしたのか莉倫は

「あ…はい、どうぞ」

嫌々そうにだが結局ノートを渡して来た。

「ありがとう」

にこっと笑いかけ、そして心の中で馬鹿な奴だ、と思う。

中途半端な良心は身を滅ぼす。

案の定ノートを貸してくれた莉倫は西納達に呼び出され、責められた揚句無視され仲間となった。

一人こう言う奴を作れたら後は同じような奴を見つけ、これを繰り返ししていけばいい。

ここから重要なのは、

こうやって一人にされた奴は大抵同じ一人である自分の元へ寄って来る。

だが、絶対近付かせてはならない。

無視しろとは言わないが、側に置いてはいけない。

つまり一緒に行動をしない事。

「私といると貴女が迷惑だから……」とか言って逃げるのだ。

私は以前、他の高校の友人<sup>まがわ</sup>万川に

別のクラスにいる友人<sup>めやこ</sup>芽也子を助けたいと言われ

このやり方を試してみると教えたが、

芽也子は寂しさのあまり、無視される人間を増やす事をせずに最初に罠にかけ、近付いて来た雨市<sup>あめいち</sup>と行動を共にしてしまった。

結果、芽也子が声をかけた雨市はすぐに元のグループに復帰してしまい、

（考えてみれば当然である。頼りにしてる雨市を取り上げれば、そりゃ芽也子を傷つける格好の材料以外何物でもない）

雨市は当然芽也子は無視するようになった。

雨市だけを頼りにしていた芽也子はとても傷ついていたそうだ。

良心があるうと、

一時でも集団無視に加わる奴を信用するなんて救いようもないが、こう言うのはよく起こりがちだ。

ちなみにこの方法は自分に友人を作るためのものでは決してない。他人を哀れむ心、良心がほんの少しでも残っている人には

絶対に向かないのでくれぐれもご用心を。

成功する保障は一切ありません。

## 甘ったれた万引き少年＋空き缶で一悶着

私がコンビニでバイトしており、休憩時間になったので、以前姉から借りた「運命を感じて」と言う小説を読んでいた。

「ねーねー昨日のテレビ見た？」

人には運命の出会いって言うのが3回ぐらい用意されてるってやつ

！」

宏也が机に顔を突っ伏して目を閉じていると、

女子達の会話が耳に飛び込んで来た。

「あつ見た見た！性別とか歳とか、あといつも悪いも関係なくってやつでしょ？」

「そーそー！」

「えっ悪い運命の出会いなんてあるの？」

「あるって言うてたよね」

「うん、その人と会ったお陰で借金地獄とか、犯罪に走るとかでさ

」

「ああ、なる」

「んじゃもしかしたらこのクラスの中にも…」

「きゃー！」

「いいよねーそう言う話」

「まあ、万が一悪い方かもしれないと思うと怖いけど」

「ほかには何か言っただけだったの？」

「お互いすぐ運命だって分かる事もあれば、

何年か経ってやっと分かる運命もあるんだって。

だから、あんましそれに囚われ過ぎるなってさ」

うつ伏せのまま、閉じていた目を開けた。

「そっか、逆に言えば長い人生で3回ぐらいしか無いんだもんね」

「しかもいつあるかも分からないだし」

運命ねえ、と心の中で呟いて、騒ぐ女子達の方に目を向けた瞬間、  
一人の女と目が合った。ほんの一瞬で、お互いすぐ目を反らしたが  
…。

彼女は剣（さき）。俺に話し掛けてくる数少ない女子の一人。  
背は高めでスラッとしていて、可愛い容貌をしている。

陽気でお喋りで、ちょっとへまをしやすい所もあるがいい奴だ。

『黙ってたら顔と合うのにな』

と男女問わず冗談で溜め息をつかれたりもしている。

彼女の事を考えていると、

いつの間にか側にいた友人がよおっと手を上げて、小声で話し掛けて来た。

「宏也、あれ聞いてたか？」

憂（ゆう）嬉が運命の話で盛り上がっていた女子達を顎で示す。

「女子ってああ言う話好きだよな」

憂嬉の言葉を聞きながらふわあっとあくびをする。

「とりあえず、やかましくて眠れねえ」

「おい。俺もやかましいに入るのか？」

「さーな」

憂嬉の腕に軽く拳を当てると、彼は相変わらずだな、と笑った。

それからしばらく経ったある日。

風邪（と言つかインフルエンザだ）の流行で生徒はもちろん寝込む  
部員が続出し、

とうとう部活が休みになった。

この調子でいけば学校も休みになるかもしれないな…そこまで考えて  
やめた。

とりあえず今日はこのまま家に帰っても何もする事が無かったので、  
適当に目が覚めるだろうと一人で教室で寝ていたら、

誰かが入ってくる気配がして目が覚めた。

「宏くんだ」

明るい声がして、顔を上げると剣がくすくすと笑っている。

「風邪引くよ」スポーツ選手は体を大事にしないと駄目じゃーん」  
「ああ」

寝起きでだるい体を起こすと伸びをした。外は少し暗い。

「今日はバスケット無いんだねっラッキー？」

「半々」

答えて、鞆を持って立ち上がる。

「何やってた？」

「え？あ、ぶ」

「部活か」

少し前に話した時、剣は美術部なのだと言っていた。

「うん、もう終わったけどねー」

「へえ？」

「ん？あ、ここに来たのはね、これを海菜かいなの席に入れに来たの」  
そう言つて小さく畳まれた紙を机の中にぽいっと入れた。

「そつか、じゃ」

「あっあのさ、宏くん」

「あ？」

「い、一緒に帰っていい？方向同じだし…部活って言つても、  
皆休んじやつて私一人だったのよ」

少し張り詰めた目をしていると思った。

「ああ」

女子と帰るのは初めてだが、剣なら嫌な気分はしない。

並んで帰つてる間、さっきまでの陽気さはどこへやら、

彼女は俯いて黙り込んだままだった。

ふと、彼女が少し前に運命がどうのこうのと言う話に加わっていた  
のを思い出す。

「前、運命の話してただろ」

彼女がはっとして自分を見た。

「う？うん」

「そつ言つ話、よくするのか？」

「別にそう言う訳じゃ…あつ」

そこまで言いかけて、彼女がまた俯いた。

「その時さ、宏くんと目が合ったの。覚えてる？」

「ああ」

覚えていたから頷くと、彼女の顔がぱつと輝いた。

「本当？私、宏くんと目が合った瞬間何か感じたんだけど、笑う？」

「俺と多分、同じ」

答えたたん、彼女は目を丸くして、口を両手で押さえると立ち止まってしまった。

顔が真っ赤である。

その意味が分かったので微笑んで、とりあえず彼女が落ち着くのを待った。

読み終わってふと時計を見た。

休憩もそろそろ終わりかな、と思うと不意に店長が、

「竜祖、あの子の相手任せるから何とかしてくれ」

と言ってきた。万引きした子だそうだ。

「皆が万引きしてるって言ってカッコよく思えて…」

ふがさほうすけ  
少年不笠峯介が話し出す。

「自慢じゃないけど」

「？」

少年峯介が首を傾げる。

「私みたいに大人になると、

店からただで物を取る事は悪い事だって知ってるんだけどね」

「はい…」

「ふーん、知ってたの。悪い事だと分かかってやって、それを楽しんだり自慢してる内はガキ。」

それを羨むのも、止められないのも、心がガキの証拠」

「だって僕…子どもだし」

「そっか、子どもだから分からないか。じゃあ、これから何回も繰

り返しちゃうよね。

そんな危険人物を帰らせる訳にいかないんだけど」

「だってお父さんいなくて、お母さんしかいなくて」

この瞬間、私の中にこの子どもに対する殺意が芽生えた。

ある事無い事を言っただけ同情を買い、

味方を増やそうとするるくでもない連中と同じニオイがする。

私はこの類の人間にエライ目に遭っていたからすぐ分かるし大嫌いだった。

子どもと言えど恐ろしい。

「貴方みたいな人、よくいるんだ」。

お父さんがいないから、お母さんがいないから、いじめられてるから、

貧乏でお金が無いから、だから仕方が無い事だって。で、それが何

？」

「……」

声色が変わったのに気づいたのか峯介は俯いた。

「さっき言ったのは甘えん坊が言う事だよ。人の言う事に流されやすくて、

人に縋らないと生きられない弱い人。もう一つは不幸自慢が好きな人ね。

不幸だってイメージを強調して同情引いて、ちやほやされたい人。

貴方はどっち？」

「……」

少年がズボンをギュッと握った。

「貴方、そう言って同情して貰って、何も無かった事にして貰おうとしてる」

「ちが……」

消え入りそうな声で少年が言う。

「何が違う？」

私は子どもと言えどそんな卑しい人に同情するような馬鹿じゃない。

演技お疲れ様」

ぴしゃりと言うと、少年は泣き始めた。

しかし、これに同情したら、自分は馬鹿の仲間入りになるだろう。  
次の日の昼休み、うとうととしていたらこんな声が聞こえてきた。

「可口、これ捨てて来てよ」<sup>かくち</sup>

見ると、気が強いと評判の並陽<sup>なみよう</sup>が、

空き缶を可口に捨てさせようとしていた。

「えっ……」

可口は突然の事に嫌そうにしている。彼女は大人しい。

「ちよつと」嫌がつてんじゃん、可口が可哀相じゃん」

姫藍<sup>きいん</sup>が口を挟む。

「だめだめ、ちゃんと拒否しないのは本人が悪いんだよ。

私はそれを教えてあげてんの」

並陽が言う。

「あ、あはは……」

可口は苦笑いだ。そこで、私は彼女達に声をかけてみた。

「おい並陽、あんた本当図々しい上に恩着せがましい女だね」

「え？あ、竜祖……」

並陽が気まずそうにする。

「相手が困ってるの分かってやってるんだろ？分かってんなら遠慮しなよ」

「だから可口の事を思ってたんじゃん」

「あんた先生じゃないだろ、押し付けんな。

怠けてんじゃないよ、ゴミ捨てぐらい自分で行け」

「はい」

それから、私が一人の時に可口が話し掛けて来た。

「竜祖さん……ありがとう」

「うん」

珍しく、何事もなく済んだ。



## いじめの現場を目撃する

柏<sup>かしわ</sup>、稲千<sup>いなせん</sup>、葉宮<sup>はみや</sup>、明鬼<sup>めいき</sup>が一人の女子高生を囲んで、

「あんた何かムカツク」

「キモイ、死ね」

と、お決まりの文句でいじめている現場に遭遇した。

囲まれている女子高生が震えて泣いているのを見て、私は立ち止ま  
って考えた。

自慢じゃないが、私はこの類の言葉を日常的に言われているので

『オリジナリティーが無いね』

とは思えないし

『こんなお決まりの言葉ってか挨拶？みたいな言葉で傷つくなんて  
馬鹿じゃない？』

とか

『むしろ暴力を振るったり、金せびったりしてるわけじゃないんだ  
から淑女かな』

とは思えないのだが、一応、分かる事もある。

私と他人は違うんだから、傷つく人もいるんだろう。

「気付かないのは本人達のみって訳か」

本人たちの後ろで言ってみた。

「は？何だよ竜祖？」

主犯格の柏が睨みつけてきた。

「腐ってるのは貴女達の方だよって親切に教えに来たのにー」

「ちよつとマジでこいつ何？」

「さあ、バカなんじゃない？」

「うざいんだよ、あっち行けよ」

「まあまあそうわめかな」

「ねえ柏、こいつ彼氏とダチ呼んでやらない？」

「あ、それいー」

「へえ、彼氏いるの。そーお。ま、腐ってる人同士仲良くね」  
女に操られている馬鹿男なんか何人来ても私は余裕だ。

寧ろ私を傷つけようとする人間を堂々と容赦なく殴れるので  
私はけしかけられるのを待ってさえいた。いいストレス解消になる  
のだ。

だが四人は全く動じない私を見て私の力を思い出したらしい。  
ちえっと思った。最近は喧嘩をしかけてくる奴なんかいやしない。

「っせーよ馬鹿！死ね！」

「まじむかつくー」

「わーかったわかった。それで馬鹿、ウザイ、キモイ、死ねの他は  
無いの？」

もう聞き飽きたんだけどな」

「はあ？」

「そうそう、馬鹿、ウザイ、キモイ、死ね、

は心が醜い人ってか性格悪い人がよく使う言葉なんだって。  
ちなみにそう言う人を好きになる人も同類なんだってさ」

一応言い方をソフトにしておいた。

「うわーマジキモイマジキモイマジキモイ」

「ねーやだー」

「ヤバイよこいつ」

「やれやれ…」

話しが通じない人と話すのは苦勞するなあ、と心の中で呟いて、  
キイキイ騒ぐ女の子達を後にした。

いつの間にかいじめられていた子は逃げていて、後でお礼を言いに  
来た。

それにしても、と思う。連中はよくも飽きないものだ。

脳を開いて見てみたい。あれほどの悪口はどこから生み出されるの  
だろう？

あの嫌がらせの才能は、もしかすると遺伝子に組み込まれているの  
だろうか？

そうそう、悪口や意地悪で繋がった人間関係がどれほど醜くて脆いものか、

私はよく知っているつもりだ。

バイト先のコンビニに、とてつもない男女がいた。

店長の奥さんと、その不倫相手の男性店員海<sup>かい</sup><sub>いざ</sub>で、

私は学校で嫌がらせの才能だけは豊かな連中を沢山見て来たけれど、まだまだ発展途上にあたるだろう。

この二人こそ完成型、天才だと思っている。悪行は数知れないと思う。

ただ、二人は私が相変わらず何も気にしないのと、

高校生で幼いのもあって物足りないのかすぐターゲットを変えた。

しかし、その二人を中心に仲間はどうぞん増えて行った。

私が更に無関心で、嫌味を言われている側から読書などをしてしていると、

休憩時間などに、私がいけないかのように、

私やいじめ仲間以外の人間の醜い悪口を仲間同士で言うようになった。

だがそれにも変化が起こった。

いじめサブリダー<sup>たかなか</sup>高中が、

いじめリーダーの奥様がいない時は奥様の悪口を言い出し、

次第に同調する者も出始めたのだ。両方に同調している人間もちらんいたが。

それが一年半ほど続いた時、私は流石に飽き飽きしていた。

休憩中の読書タイムを邪魔されるほど嫌な事は無い。

そんなある日の夜、いじめ仲間内でも急にターゲットにされ始めていた彼女、

正社員で一人暮らしの草<sup>くさ</sup>己<sup>つひ</sup>さんは遺書を遺して自殺したのである。

彼女は遺書をいじめ連中に目立つ場所：ロッカーの壁に貼っていた。

「私は（いじめ仲間の名前羅列）達に死ぬほどいじめられた、死んでも恨み続けます」

彼女達は遺書を見て笑い転げていた。床を実際転げる真似をしている者もいた。

その後、彼女達（と男一人）は、証拠隠滅を図って遺書を破り捨てていた。

彼女が自殺する一ヶ月ほど前に、店長の奥さんとした会話は未だに覚えている。

私は本を読み終えたところだった。

そこに奥様が入ってきた。入るなり私を怒鳴ろうとしたが、先手を打った。

「奥様」

「は？」

「あの、高中さんが奥様の事、マジキモババアって言っていました。本当は、伝えようか迷ったんですが…耳に入れておいた方がいいかと思ひまして」

と聞いたままを言った。

その時の奥様の顔！まるで面白い般若のようだった。

「ちよつと高中さん、こつちへ来て」

奥様の声がした。そこから先の会話は聞いていない。けれど、ここからいじめ仲間同士で戦いが始まった。

私は周りの大人の、余りの幼稚さに呆れた。たかが、傍観者の私の一言で。

これはうつとうしい学校の連中にも応用が出来そうだ。

連携して誰かをターゲットにしている間がいいが、

ひとたび連携にヒビが入ると、お互いの醜さをお互が一番よく知っているためだろう、

いがみ合いも半端なものではないとだけ学び、私自身はいたって平和だった。

忘れてはいけなかった、

草己さんが自殺する日の夕方、突然電話がかかって来た。

「あのね、あなたに言うのもおかしいけど、

警察に、私の家の机の中を見てつて言えば分かるから……」

それで電話が切れた。

その後、私は、自殺した草己さんそうきの墓へ一人で行った。

「あなたも色々私や他の人に悪さしてたから、

きっと（あるなら）天国にはすぐ入れないでしょうけど……でも、

あのまま生きてあの人達についてたら罪を重ね続けて、

本格的に地獄に堕ちる事になってたでしょうから、

罪を重ねる前に死ねたから、よかったですよ。

今の所、あの人達は元氣にお互い嫌がらせ合戦をしていますよ。

知らぬ存ぜぬだけはちゃんと連携してましたけど……。

ただ、頼まれてたから……警察に教えておきましたから。

それに、あの人達がしてた事を聞かれたから、

あなたの事も含めて全部言いました。ではっ」

私は晴れ晴れとした気分で家へ帰る。

## 嫌味な女教師

どうしてもとりたいと思う選択授業があった。

それは美術の授業で、他に音楽や体育や書道がある。

表向きは全クラス対象だが、

実際は金持ちの上品なお嬢さん達が選択する事がほとんどだった。

友人達は誰ひとりとして選ばず、私が美術を選ぶというと、

珍しがるのと同時に一緒に体育にしないかと誘ってくれたが、

私はどうしても美術を選びたいので断った。

今日は初めての選択授業。

教室に入ると知った顔は無く、

すでにお嬢様同士でグループで固まっていて、不審そうに私を見て  
いる。

とりあえず、彼女達と離れた所に一人で座った。

「あら、貴女が私の授業を受けますの？」

教室に入って来るなり担当の女教師が聞いて来た。

「はい」

「貴女、この前の音楽の授業を受けていて？」

「いいえ」

実は、この女教師は、前は音楽を担当していて、  
美術の授業でも音楽の話を交えながらするのだった。

選択授業の注意書きにそれは書いてあったが、

その音楽の部分は独学で何とかなると思っし、勉強するつもりだっ  
た。

教師は更に続ける。

「私の授業が前は音楽、今は美術の二つに分かれてるのは意味があ  
りますの。」

普通はもう一つの方を先に受けるんです」

私の反応を確かめるようにちらりと私を見る。

「まあ、わたくしの立場上、拒否は出来ませんけれども。」

拒否は出来ませんけれども」

私は心の中で溜息をつく。

はいはい、二度も繰り返さなくても私を追い出したのは分かっていますから。

出ていかないけど。

とりあえずこのババア（本名は夢乃沢純花<sup>ゆめのさわすみか</sup>、本当は35）とは一年付き合うのだ、

事は荒立てないでおこう。

さて、腐ってるのはAかBかその他か

「…っ！」

すれ違いざまにぶつかられた。明らかにわざとだと感じた。

「いったあゝいゝ！」

伊吹乃<sup>いぶきの</sup>が大声で叫び、キッと睨んで来る。伊吹乃はモデルのように美人だ。

だが私から言わせると性格は悪い。私は何故か目をつけられてしまった。

思い当たる節は全く無い。私は私以外の他人と関係が無いからだ。

「おいお前！ぶつかつたなら謝れよ！」

近くにいた光務<sup>みつむ</sup>が怒鳴った。光務は伊吹乃に好意を寄せている。

伊吹乃が、光務に見えないようニヤツと笑う。光務が心配そうに「大丈夫か？」

と伊吹乃に言う。

「いいの、痛いけど平気だから気にしないで」

「お前は優し過ぎるんだよ、それより謝れよ。お前だよブス！」

次の瞬間、私の右手は光務の口をガツチリ押さえていた。

「お前、は、黙って、ろ」

それからドンツと光務を突き倒す。そして伊吹乃を睨み付けた。人が周囲に集まり始めた。

「私の周りには、あんたみたいにわざと他人を悪者にして

男の同情を買おうとする性格ブスがたくさんいるから、

私にはすぐ分かるよ、そう言う演技」

「ひっどおーいひっどおーい！」

「はあ？わ、訳分からない事言ってんじゃねーよ！謝れよ！」

光務は私に押さえられた事に相当びつくりしたようで、先程より声の勢いは弱い。

「大嫌いなんだよね、そう言う女も、そういう女に騙される男も」



光務と伊吹乃を思いつき睨み付けると二人が怯んだ。

「二度と私に近寄るな。話しかけるな。出来るでしょう？目があ  
るんだから」

吐き捨ててさつさとその場を後にした。

教室に戻り、イスの上に置いてあった画鋏を払い落とすと、  
むしゃくしゃした気持ちを読書で落ち着ける。

「閉じ込められた人工竜の行き先は…？」と書いてある本を出す。  
タイトルは「吹き込み屋さん」と言う、優しい物語だ。

水豊かなアルゴア国に、ラダと言う老人がいた。

ラダはかつて魔法を学んだ。

ラダの得意な魔法は自らが作った作品に命火を込めるフィンムイン  
の魔法で、

人形等を動かして子供を喜ばせ、  
いい音をひとりでに鳴らす楽器を作って大人に安らぎを与えたりす  
る

優しい人だった。

ラダの噂を聞きつけたトラヌア王は、

彼に精巧で大きな竜像を造らせ、命火を吹き込め、と命令した。

竜の鱗は硬い宝石や翡翠で作り、鬣には不死鳥の羽、

角は海の魔力を秘めた珊瑚、目には深海の闇を封じた黒真珠と、  
どんな硬い剣や槍も効かない。

つまりこの竜に命を吹き込んで、城を守らせようとしたのである。

王の命令では嫌とは言えない。

長い時間をかけ、ラダは竜像を完成させ命火を吹き込んだ。

ラダは王に、

「あと半月程で、竜は目を覚まします。どうか王様、竜を大事にし  
て下さい」

と頼んだ。

しかしラダは力を使い果たし、竜が起きる所を見ずに亡くなった。

王は重臣と、竜の為に造らせた巨大な神殿の中で、

竜が目を覚ますのを待っていた。

ラダの死より数日後、美しい鱗と爪が神殿の大理石の床に擦れる音がして、

竜は澄んだ黒目で周囲を見渡した。

「目覚めたな」

王は笑顔で竜を眺めた。

「我、ラーファーン…」

竜は、最初は神殿の中で、学者や大臣より勉強を教えられた。

竜は覚えが早く、幼い振る舞いや言葉も日に日に立派になった。

しかし、竜に城を守らせようと外へ出すと、困った事が起きた。

太陽の光を反射する竜が眩しくて、誰も目を開けられないのだ。

これでは敵も味方も困ってしまう。

王は竜を神殿へ閉じ込めてしまった。

宮殿では、連日竜をどうするか、と言う会議が開かれていた。

ある日、竜の番人を務めるアラナフが青い顔をしてやって来た。

彼は竜に向かい

「大変な事になった！」

と言い、王達が竜の命火を消そうとしている事を伝えた。

彼は、竜が命火を吹き込まれていない頃から見張りをしていて、

自らの命を疑問視する竜に

「いいか、自然な生物の命と、何かの故意が原因の命がある。

全て命の行方は、あの夜の海にいる夜の女王が決めると言われる」

と、教えたり、慰めてくれた親切な番人だった。

アラナフは竜に逃げ方を教えた後、

「今だから言う、私は身体が弱かった。だがある時夜の女王の使いが来て、

君に似た竜の幻を見せて、その竜を守るよう言われた。

その日から身体が丈夫になって、俺は、女王を信じるようになったんだ。

「さあお行き！」

竜は頷くと、彼に言われた通りに神殿を壊し、夜の海を目指す。夜の海の中心に、奇妙な歪みを見た。

異質な時間と世界を繋ぐいびつな穴だ。

竜が穴に飛び込むと、穴は暗くなり、また光ると消えた。

盲目の夜の女王は、夜の海に侵入した何者かの気配を感じ、驚の星像リヤノトウに命じてそれを引き上げさせた。

「元は造竜……」

女王が、竜の体から感じた幾つもの傷。

夜の海の深部に巣喰う怪物との、壮絶な戦いの証だ。

「中々の闘いぶりでした……見込みがありますな」

女王が竜の背を撫でると、気絶していた竜は、驚いたように頭を上げた。

「こちらは、大いなる夜の女王、ルナアパメ様ですぞ」

リヤノトウが厳かに言った。

「お前に、命を吹き込んだのはラダ……？」

竜は頷いて肯定した。

「ルリーンナネル（大いなる女王の、十一人の愛弟子）の一人ですな」

と、リヤノトウ。

「お前……ラーファーンか。お前に、リヤノと共に夜の海を守れ、と命じる。」

リヤノ、この竜は成長しきれていない。

育てておやり、お前なら安心して任せられる」

「御意」

「さあ、二人ともお行き」

竜が大喜びで夜の海で体を翻す度に、夜空に美しい波紋が広がる。

ある時、リヤノトウは女王にラーファーンの近況を告げた。

「女王様。私はラーファーンに、幾つか私の炎をプレゼント致しました」

「ほう。それはいい」

女王は満足そうに頷く。

「ラーファーンの命火に合わせて踊るリヤノの炎、か。  
伝わって来る…揺らめく感じが中々いいな」

気持ちはだいぶ落ち着いていたものの、私の予想通り、次の日には

『伊吹乃にわざとぶつかった揚句、中傷した』

と言う噂が流れ、またしても集団無視に発展した。

しかし常に一人でいる自分には余り関係がない。

人を徹底的に近付かせないのは理由がある。

人を近付かせない性格だと教師どもにも知らせることで、

人をいじめたと言う最低な濡れ衣を着せられる事は

かろうじて逃れる事が出来るからだ。

逆に金を盗まれたとか、今回の伊吹乃のような場合の標的にはなり  
やすいが。

私は何を言われても構わないと半自暴自棄に思っているものの、  
されるのは嫌だ、許さない。御免だ。

あの時伊吹乃を近付かせてしまったのは

気を緩めていた自分の落ち度だったと深く反省した。

それにしても集団無視は楽だ、

誰を信用すべきで誰を信用しないでおくべきか私に教えてくれる。

## お金に注意

修学旅行のグループ決めにて。

先生がお情けであるグループに入れようとしてくれたが私は

「修学旅行休みますから気にしないで下さい」と言った。

家に帰って親にそれを話したら怒られたのでやむなく先生の余計な情けに従った。

彼女たちが計画を立てるのも口を出さずにただ見ていた。

本当は、自分達で選んで回れるコースの中にとても行きたい所があったけれど、

「嫌われ者」の自分は荷物で、その上に違う意見を言うとは

彼女たちの楽しい計画を邪魔してしまう。それが「迷惑」に値するのは

自覚していた。私は馬鹿じゃない。円満に行けばそれでいいと思っている。

修学旅行は悪くなかった。教室よりは空気が綺麗で新鮮だったから。

くよくよするのはよくないし、団体行動を乱すのもよくないから、

固まって騒ぐ彼女たちから離れ過ぎない程度に一人でいて、

私なりに楽しむようにしていた。

途中で彼女たちが店に入ったので自分も仕方なく入って色々な物を見ていたら

いつの間にか置いてけぼりにされていて、

一人で勝手に行動するなどと先生に怒られた事があったりはしたが。しかし部屋割りが問題だった。

6人グループに3人部屋を割り当てられたから二つに分かれる。

誰も私と同じ部屋になりたがらなかった。そう言うのは空気で分かる。

そして私もなりたくなかった。

私以外の他人といると、「物を盗んだ」事件を起こされて、その犯人扱いされかねないからだ。

そして逆も有り得る。私とてさすがに寝ない訳にはいかない。

先生に一応「私いると皆が迷惑なので先生の部屋においてください」

と駄目もとで頼んだが「特別扱いできない」と断られた。

そして部屋割りが決まった。

私は風呂をすぐ済ませてベッドの中に入って、

「突然部屋に現れた不思議な女は、助けてくれた人魚に似ている」と表紙に書かれた、今お気に入りのファンタジー小説「晶喰い」を読み、

もう関わらないようにしていた。

明日は土曜日。テスト週間だから部活も無い。

亜夜<sup>あや</sup>はベッドの上で、夜遅くまでスタンドをつけて漫画を読んでいた。

漫画を読んでいる間は何も気にならなかった。気がつくとも亜夜は眠っていた。

亜夜はどこからともなく

「亜夜ちゃん、亜夜ちゃん？」

と呼ぶ声が聞こえて目が覚めた。

「え？誰？？」

不思議に思つて暗い部屋を見回すと、

ぼうつと白い人影がベッドのすぐ側に見えた。顔も服もはつきりしない。

幽霊！？と思つたが、亜夜は幽霊の存在を信じていたから好奇心の方が強かった。

「だ、誰…？」

すると幽霊に見える人影は

「あら、私を見て怖がらない人間なんて珍しいわね、うふふふ…」

と笑った。声に聞き覚えは全く無かったが、ふと何かの雑誌で知った浮遊霊の事を思い出し、困った事になったなと思った。

「ねえ。あなたは死んでるの。成仏して下さい」

「私は霊なんかじゃないわ」

「え!？」

亜夜は試しに念仏を唱えてみたけれど白い影は平気なようだった。むしろ徐々にはっきり姿を現した。全身が水のような、透き通った綺麗な女だった。

髪は月の光を通して青白く煌めき、目はサファイアのように青く深く澄んでいる。

服装はギリシャ神話の挿絵に描いてあった女神様に少し似ている。どこかで見たような…

「私を覚えていないかしら？」

亜夜は必死に頭をめぐらせた。そして思い出した。

「助けてくれた、人魚さん…？」

七歳の時、亜夜は不思議な体験をした。

海で溺れた時に、人魚みたいな女に助けられた。女がにっこり笑った。

「人魚ではないけどそうよ。思い出してくれたのね、嬉しいわ。

それでね、あの時、貴女の中に光を送ったの。覚えてるかしら？」

こう言つて、女はベッドに腰掛けた。

「う、うん…」

「あれから丁度十年経ったでしょ…ちゃんと成長したみたいだから、貰いに来たの」

言つて、女が手をかざすと胸の辺りから手の平大の、水晶のような球体が出てきた。

虹色の光を放っている。

「やっぱり!」

女は嬉々として叫ぶ。

「こんなに綺麗に育ててくれたの、あなたが初めてよ。ありがとう」  
こう言って、女はにこっと笑った。と、不思議な事に女は消えてしまった。

亜夜は気を失った。

亜夜は夢を見た。小さい頃の夢だ。

家の近くにある海で泳いでいたらにわかに天気が崩れ、

高くなった波に飲まれ水に沈んだ。苦しい。誰かに手を引かれた。

苦しくなくなった。すぐ近くに女がいた――亜夜は人魚だと思った

――

人魚が自分に手をかざしたら小さい光が胸に吸い込まれた。

次の瞬間、漁師の力で船の上へ引き上げられた。

亜夜は女の話をしたが信じて貰えなかった。

「本当よ！本当に人魚はいるんだからね！」

亜夜は自分の叫び声で目を覚ました。まだ真夜中だ。

体が少し震えたが、怖いのではなく寒かったからだ。

ベランダに出て空を見上げた。綺麗な星空だ。私の中に入った光に似ている。

ベッドに戻り、亜夜はそっと目を閉じる。何だか幸福な気分だった。不思議な、澄んだ音がしたのはその時だった。

気がつくとも面に白い雲が立ち込めていて、

そよ風が亜夜のパジャマの袖を揺らして通りすぎていく。

あの女がガラスの虹のような橋の上に立って下を見ている。

女のすぐ下は見渡す限り水ばかりだ。水中には無数の光がある。

穏やかで本当に静かな世界だ。

女が長い杖を海の中に入れ、ゆっくりかき回した。さっきの音が聞こえた。

その時、少し離れた所に赤い目を光らせた黒いものが頭を出したのが見えた。

「お前：お前の血は毒だ、去れ！」

女が黒いものに向かって怒りの声を上げた。だが影は動かない。



女が光を取り出した。亜夜から取り出した光だ。

光に息を吹きかけると、光は形を変え槍となった。

その槍を黒いものに向かい投げつけると狙いは外れず命中し、黒いものは粉々になった。

不意に生臭い風が吹き始めた。黒雲が近付いて来て、空は真っ暗になった。

「どんなに脅しても無駄だ、お前にここを渡しはしない！」

亜夜は飛び起きた。

「夢？」

亜夜は首を傾げた。

「夢じゃないわ」

あの女がベッドの側に立っていた。困惑して見つめていたら、女はまたベッドに座った。

「何があつたの？」

女は微笑んだ。

「聞きたい？」

「ええ、だって面白そうなんだもの」

「亜夜？起きたの？ご飯よ」

ドアの外から明るい声がした。お母さんの声だ。

「行つてらっしゃい」

「でも…」

消えてしまうのでは？

「大丈夫、待つてるから。ただし、私が部屋にいる事は内緒よ」

亜夜の考えを読んだように女は笑った。

大急ぎで朝ご飯を済ませ、勉強するから部屋に入つて来ないでと家族に厳重に言い含めて部屋に戻ると女はちゃんとした。

「それで、貴女は誰？あの黒い影は何？あの世界は？」

女は少し考えたようだった。

「あなた達の世界で言う命は、私の世界で水になるの。死ねば減り、生まれれば増える。」

私の世界はどこを見ても水ばかりだ。あなたも見たでしょう?」

「うん」

「私はあの水を守る番人。」

番人と言っても、普段は命の波に身を任せて眠っているだけだったけど」

「あの水の中にあつた光は?」

女は苦笑した。

「あれは、私が貴女に植えつけたのと同じものよ。」

あの水の中でしか成長出来ない、ある結晶の種なの」

「?」

亜夜は首を傾げた。

「簡単に言えば、真珠のようなもの。真珠は貝の中に胚を植え込んで、

何年か後に適度な大きさに成長したら採取するでしょう?」

私は真珠を作るのと同じように、この結晶の種を水の中に流し込むの。

ちゃんと成長した結晶は、貴女にしてみたみたいに直接採取するのよ。

私はあの水の中に入っていけないから... ちよつとびっくりさせちゃうけど」

「何の為に?」

女は顔をしかめた。

「『あいつ』が現れてから、そうしなければいけなくなったの」

「『あいつ』って、あの黒い影のこと?」

女は頷いた。

「全ては『あいつ』を倒す為よ。結晶で作った武器でしか、

『あいつ』に対抗出来ないから... 『あいつ』は私と違って水の中を自由に動けるし」

「あの」

と、亜夜はすぐに言葉を返した。

「『あいつ』の血がどうのって言ってたけど...」

「以前、通常の武器であいつを傷つけてたわ。でも、あいつの血は水を汚すのよ。」

あの水は全て命。穢れる事は許されないの」  
それで、亜夜は納得した。

「『あいつ』って何者なの？」

「正体は分からない。ある日、私に語りかけてきた。」

『番人の権利を譲れ』とね。でも私は拒否した。『あいつ』は命を作り替えてしまうから」

「どうなるの？」

「水を凍らせてしまう」

「凍るって…」

「新しい命が生まれなくなる」

亜夜はゾツとした。女は続けた。

「結晶の方にも問題があつてね、全てが上手く成長する訳じゃないの。」

どうしてかは分からない。

ただ、この結晶を成長させる事が出来る人間が死ぬ事は、私にとっても多大な損失だから…」

「だから、助けてくれたの」

女が頷いた。

「結晶を上手く成長させられない人間はどうなるの？」

「特に何もないわ」

「でも、もう『あいつ』を倒したんでしょ？」

番人は苦笑した。

「何度倒しても、『あいつ』はまた甦る。それがいつになるかは分からないけれど…」

「そんな」

「事実よ。昔からそうなの。あなたが生まれるずっと前からね。」

…お喋りが過ぎちゃったかしら。私は戻るわ。『あいつ』が甦るまで、眠らなくては」

「そう…」

亜夜は心配になった。

（大丈夫なのかな。たった一人で？）

「心配してくれてるのね、ありがとう。」

私の事を考えてくれるなら長生きしてちょうだい。そうしたら、また会えるわ」

やがて、番人の姿は見えなくなった。

亜夜はその晩、眠っていても番人の事を考えていて、気がつくところの世界にいた。

番人の前に小さい男の子がいて、しきりに何かを訴えている。

「ダメだ、あなたの水はもう使えない。」

あなたの水は死んでいるのだから…早く流れにお戻り」

優しい番人の言葉に、男の子は頷くと水に飛び込み、消えた。

亜夜の視界がぼやけ、やがて見えなくなった。

読み終わると同時に、耳障りな雑音が入って来てしまう。

「あゝあ、本当ならここに美凧ちゃんがいるはずだったんだけどな」

と言いかう他の二人の言葉を聞きながら気を張り詰めていたが、やがて何も分からなくなった。

次の日、やはり事件が起こった。

「あれゝ無い、おかしいなゝ」

と言ふ鈴帆すずほの声で目が覚めた。

「何が無いの？」

と梨翠りすいが言う。

「お金が無いの、千円」

二人が自分の方を向いた。

「美凧が完徹したって言ってたから美凧じゃない？」

ぶっきらぼうに言い放つ。

隣の部屋にいる人達はこっそり私がいる部屋にやって来て

「一時間しか寝てない」ほど騒いでいたのだ。

「あ。こんなところにあったよ」

鈴帆が財布の隅に折りたたんで入れてあった千円札を取り出す。

鈴帆の「勘違い」だっのだ。

## お金に注意2

帰りの会で「財布がなくなりました」と仲国なかぐにが報告する。

仲国の話では、3時間目が体育で空き教室だったから

その時に盗られたのだろうと言う事だった。

また嫌な予感がした。着替えが一番早く、一番に運動場に出るのは私、

体育が終わって真っ先に帰るのも私だからだ。

先生は「心当たりがある人は知らせてください」と言い、終わった。

だが帰りの会が終わった後、自分の周りに仲国、美結みゆつ、貴緒きお、浩美ひろみが集まってきた。

「ねえ、あんたじゃないの？」

「あの時教室にいたの紗鶴じゃん」

「ちよつと荷物見せて」

止める間も無く仲国が荷物を開けた。

そこにはあるはずの無いものが入っていた。仲国の財布だ。

「うわーやつぱり紗鶴だった。最低！」

口々に言う連中を見て私の中で何かがブチッと音を立てて切れた。

「私じゃない！」

「証拠があるじゃん」

仲国が財布を突きつけてくる。周囲にまた人が集まってきた。

「やつぱりあいつかー」

と言う声もちらほら聞こえる。

「分かった。警察行こう。今から電話するから」

携帯を取り出すと彼女たちが慌て始めた。

「何？その開き直り」

「財布戻ったからもういいし」

「嫌だね、もううんざりだ。いいじゃん、本当の事が証明されるん

だし」

1、と番号を押した。

「やめなさいよ！」

仲国が叫んで私の携帯を取り上げようとする。

掴みかかってくる仲国を振り払った。怒りの余り笑い出していた。

私はついに椅子を持ち上げた。

「キャッ」

4人が怯んだ。

「警察に行つて、私が盗んでないと証明されたらこれでお前達をぶん殴るからね！」

涙が溢れてきて止まらなかった。

「よかったじゃない。警察に逮捕されるんだから。本当に盗んだんならね！」

バンツと椅子で自分の机を思い切りぶつ叩く。大きい音がした。

かろうじて彼女たちを殴るのは思い留まった。

してはいけないと分かっていたから。ああ殺したい。でも犯罪者になりたくない。

いじめられて同級生殺害をする人の気持ち分かるし正直羨ましいけど。

ここでブレーキがかかってしまう私は偉いと自分で自分を褒めた。

彼女達は逃げ去り、誰かに呼ばれたのか駆けつけてきた先生に私は怒られ、

翌日財布の事には触れられず

「暴力を振るつてごめんなさい」と彼女達に謝らさせられた。

先生が「盗んだのは竜祖ではない」と皆の前で改めて言った。

結局警察に行く事は出来なかった。

先生によると仲国達の情けで「仲国の勘違いにしてくれた」のだそうだ。

少し残念だ。親からも怒られたし。

## 嘘つきはサイコパスへの始まり

私の人生の汚点と言えば、小学生の頃『目には目を、歯には歯を』  
と言う考えを持ってしまったと言う事だ。

小学校の頃、私はいじめて来た連中、特に主犯格だった桃織もおりに  
同じような事をして仕返しした事がある。しかし人数が必要な集団  
無視は出来ない。

そんな友達はいない。私が一人なのは小学校からなのである。  
で、桃織に何をしたかと言うと、

私は画鋏を包んだ手紙を入れた封筒を桃織に直接渡した。

結果、私が給食にゴミを落とされても、机を油性ペンで落書きだら  
けにされても

靴を捨てられたのを言っても何もしなかった教師が動いた。

桃織が先生に泣きついたのだ。

ちなみに桃織は先生受けがよく、親はPTAの会長とか何とか。

小学生の頃はまだ先生を頼ると言うつくづく馬鹿な事をしていたの  
だ。

そして私は桃織と二人で話し合いの席を設けられ、先生に怒られ、  
泣いて謝らさせられた。

ついでと言う形で先生は桃織に私へのいじめを謝るよう言い、桃織  
も謝ってきた。

そう、小学生の時は泣く事もあった。確かに画鋏はやりすぎたかも  
しれない。

中学生になってからしばらくしても、私はいつも本を読んでいた。  
少し低学年向きの本で「稲妻に捕らわれる」と言う話し。

稲妻が駆け巡っている、ある町の話で、実話を基にしたミステリー  
風の小説である。

この町は低い位置に立ち込める薄い白い雲に覆われた街だった。



白い雲を透かして見ると暗い空を無数の稲妻が縦横無人に駆け巡っている。

住人達は白い雲を通して稲妻が落ちる事が無いのを知っていた。ただ、この稲妻は意志があるかの如く人を打つ。

白い雲の切れ目から、または少しでも雲が覆っていない範囲に出てしまった人を。

だから、白い雲があるから絶対安心と言う訳にもいかなかった。

だが、稲妻をどうにか出来ないか、逆に利用出来ないかと考えている者達もいた。

屋根の上で作業している三人もだ。

男が二人と女が一人。

三人は屋根の上にテレビ等の機材を持って登り、稲妻のデータを少しでもとろうとしていた。

しばらくして。

「何なのよっあれ！」

ひどく興奮した様子で黒髪の女が叫んだ。

「おい、静かにしろ」

白髪の若い男が屋根に置いたテレビには、何かの映像が映し出されていた。

「だって、見てよあの煙！」

叫んだ女が指差した方を見ると、

すぐ側の建物に、さっきまで無かった筈なのに、煙突が出来ていた。そこから黒い煙がものすごい勢いで出ており、空の雲をほんの少しだけ黒く染めていた。

「またか」

白髪の男が舌打ちする。

最近、不思議な現象が各地で起こっているのが報告されている。

ある日突然、不透明なガラスで出来た円筒形の煙突だけが

地面から生えているかのように立っており、そこから黒い煙を吐き出し続けているのだと。

この煙突には入り口も何も無く、中に入るには黒い煙を出している開口部しか無いのだが、

黒い煙にはひどい毒が含まれていて近づけ無かった。

「あちらの方が最悪だ」

残る一人が更に遠くを指差した。

見ると、自分達の位置からやつと見えるぐらいの街には、

黒い煙を吐いている煙突が何本もあり、その町を覆う雲の色がどす黒くなっていた。

黒い雲は稲妻を通してしまつと三人は知っている。

黒い雲に覆われた町がどのような末路を辿るのか、その場にいた全員が青ざめた。

読み終わったあたりに、

同じクラスになつた由田子ゆたこが突然話しかけてきた。

「紗鶴つて桃織の事をいじめたの？」

桃織は違うクラスだった。

「知らない」

由田子はそれに構わず続けた。

「なんかねー、桃織が紗鶴にいじめられたつて皆の前で言いまくつてたから」

「そう。で、何であんたはわざわざ知らせに来たの？」

由田子是不機嫌そうに言った。

「本当なら、あんたの事許さない」

「ふん」

一瞬、友達である由田子がいる桃織を羨ましく思った。

「で、どうなの？」

「私は謝らせられた。言い訳にすぎないかもしれないけど原因を作ったのはあっち。向こうも謝った。

もう私の中では終わった事。はつきり言つてどうでもいい」  
数日後、由田子が再び言ってきた。

「聞いてみたわよ。『でも紗鶴は謝ったんじゃないの？それで決着ついたんじゃない？』」

つて。そしたら桃織は『一応ね！。でも私は許してないけど』だったさ」

私はすぐに直接桃織を問い詰めた。普段人と関わらない私も、明らかに私へ害を撒き散らす可能性が高い奴を放っては置けなかった。

私は小学生の頃から訳の分からない事で責められ、謝らせられた。

その恐ろしさを身に染みて知っていたからだ。

桃織は知らない、言っていないの一点張りだ。私が

「本当に終わったと思ってるのね？あんたが原因なのよ？

忘れたとは言わせない、二度とその話を持ち出さないで、他の人に言う話じゃない」

と何度も念押しして、桃織は分かっていると云った。

だが私は嘘だと見抜いていた。それなら由田子が言ってくる訳がない。

何より由田子を観察している限り、彼女は賢い人だったし、

冷静な判断を出来る人物のように見えたからだ。

しかし桃織を問い詰めながら、私はどうしようも無い空しさに襲われていた。

桃織はまた私に害を与えるに違いない。

桃織とその仲間が私をいじめたのは事実だが、桃織の方が結局味方が多いのだ。

今幾ら言ってもそれは変わらないと悟ってしまったのだ。

第一、私に味方はいないのだ。下手したらこうして問い詰める事さえ

いじめたと脚色して言われかねない。（事実、後でそうなった）

「あんたは卑怯で嘘つきだからこの話も脚色して言うんでしょ、もうあんたの嘘つきぶりには呆れたわ。」

お得意の嘘ばらまいて、またろくでもない味方作るんでしょうね。でも言っておくけど、あんたが私にした事は、あんたが幾ら嘘つこうと変わらないし、

あんたのろくでもない味方に何を言われても私は何とも思わないから」

桃織の事は私の人間嫌いにかんりの勢いで拍車をかけるだけの結果になった。

机に戻って、表面には出さずにうなだれる。

私以外の人間は本気でどうでもいいと思った。その時、机から一冊の本が落ちた。

「老人と、水の精霊のおはなしです」と書かれているその本。本に描かれている美しい水の精霊は、あたかも読んで下さいと言うかのように私を見つめるのだった。

老人が森の中で、広い湖を見て佇んでいた。

その視線の先、湖の中央で美しい娘が優雅に踊っていた。

「私を見て」

娘が老人に言くと、老人が笑って頷いた。

「ずっと見ているよ。君は、出会った時から変わらないね」

二人が出会ったのは、老人がまだ子どもの頃。

老人は小さい頃からバイオリンが得意で、

一人で森へ行っではお気に入りの湖のほとりでよくバイオリンを弾いていた。

ある時、バイオリンを弾いていると水の中から綺麗な女が彼を見ていた。

湖には昔から幽霊と精霊の伝説があった。

「――」

娘が、老人に何か言ったようだった。

「ん？何て言ったんだい？もう耳が遠いんだ」

「あなたも、まだ踊れるわって言ったの」

トン、トン、トン…

彼女が水の上で軽やかにステップを踏む度に波紋が広がっては消えて行く。

踊り続けながら娘が言う

「私の心はずっと幸福だわ、貴方が幸せに生きて、死ぬお陰でね」

彼女は水乙女と言われる水の精霊だった。

「欲を言えば、もう一度あなたの人生が戻って来たらいいのにね…」  
娘が寂しそうに言う。

「ありがとう」

「これが最後よ、私を見て」

「ああ」

頷いて娘を見た瞬間。

「そろそろ時間だ」

後ろから声がした。振り返ると、病気で死んだ親友だった。

彼の体には白い翼が生えている。

「迎えが来た…貴方が愛した人達…家族の元へ戻りなさい。

最後のお別れを言つて、安らかにお逝きなさい。運がよければまた会えるわ」

老人は頷いた。

「さあ早く！」

友が再び叫ぶ。

「今行く」

彼女の方へ振り返る事はせず、親友の元へ駆け寄った。

「急げ、時間はそんなに無いぞ」

二人の姿はその場から消えた。

娘は、さっきまで老人がいた場所にそつと呟いた。

「いいわね、人間には魂があつて…」

水乙女には魂が無い。魂を持つ為には愛を持たなくてはならないがそれも無い。

だから、生まれて最初に出会った人間の心に自らの心の一部を同化

させ、

一生を見守り続ける事で愛を覚える。

その人間が愛を知らない冷たい人間として一生を終えたら水乙女の体は凍りつき、石となり、

粉々に砕けて消えてしまう。

娘は老人がいよいよ天国に迎えられるのが分かり、泣きながら彼の為に祈った。

涙を流すのはこの時が初めてだった。

「ああ、ありがとう…私の中にちゃんと愛がある…これが愛…」  
たちまち娘の体に白く美しい翼が生え、娘は嬉しそうに天へ高く高  
くのぼっていった。

読み終わった後、ため息をつく。

私は、他人に何を言われてももちろん構わなくなっていた。

さすがに桃織達に操られた男が私を叩いたり教科書等をぶつけたり  
してきたら

その男達にその場で十分仕返しはしていた。力はあった。

そうしていたら言われる事はあってもされる事は無くなった。

私の味方は私だけ。私は私が大好き。私以外の人間は皆嫌い。

それでもふと思う事がある。

一体いつからこんな考えになったんだろう？

少なくとも小さい頃は違ったのに。

## 邪魔な恋愛感情

「なあ竜祖、お前いつも一人だよな。寂しくないか？」

廊下を歩いていたら煩いのが近寄って来た。彼の名は幸真。

最近付き纏われて非常に迷惑なのだ。

「……」

目を合わせず無言を貫く。私は今『脳内変換』と言う小説を読んでいる。

月花は、仲のよい後輩である亜斗が好きなのではと軽い噂がたった。

「月花、お前亜斗の事が好きなのか？」

と、亜斗と仲の良い、月花と同級生の春日が聞いてきた。

「好きって……んな大げさな。いい子だなとは思っけど。」

それに好きって言うかいいなって思うのはやっぱりあの人かな。」

月花は懂れている先輩（と言っても社会人だけど）を思い出した。

春日が月花をじろじろと見て、少し不機嫌そうに言った。

「あのさ月花、亜斗は一途な奴が好きだから

『どうして俺に気があるのに、他の男と遊ぶんだ』と思うと思うよきつと」

月花はちよつと肩をすくめた。確かに男の友人は沢山いる。

でも何で急にそうなるのよ。ってか、亜斗君はそこまで要求してるの？

「え？何言ってるのよ。あの子、好きな人いるでしょ。」

その子一筋だし、頑張れって言っておいたわ」

「まあ、そうだけだな」

春日が相変わらず不機嫌そうな口調でそう言った。

「お前本当に笑わないのな。顔はいいのにつまんねえの」

「……」

無言を貫いて、次のページをめくった。

「そっぴやごめん、折角女の子紹介してくれたのに、また続かなかった」

今度は打って変わってしおらしく言った。

「やっぱ俺、お前とじゃないと続かないんじゃないかな」

月花は慎重に口を開いた。

「やけになつては駄目よ。またフリーな子見つかったら言うから」

「……。悪い、俺、お前に迷惑かけてばかりだな。何でこんなに続かないんだろ……」

月花は春日が女と続かない理由を知っていた。それは、彼の気の短さと幼さ。

と言うのも、春日は相手からメールが来ないとすぐに不安がつて、俺の事を嫌いになったのだろうか云々と月花に言ってくる。

月花に言ってくるだけならまだいいが、

相手にも何でメールをくれないのかと文句を言っているらしい。

愛想をつかした相手がひとたびメールを続ける事は出来ないと言うと、

相手に暴言を吐いて終わるのだ。その繰り返し。

そう言う所を直せとさり気なく注意しているのだが全く効果は無いようだ。

月花は心の中でため息をついた。私がしてやれる事はやっていないと思う。

いい加減、春日には見切りをつけた方がいいかもしれない。

「またな！」

うっとおしい幸真が去った。私は緊張していた。誰かが走って来る気配がした。

まずい！と思うてよけたがブチッと言う音と共に頭にごく軽い痛み



を感じた。

「知ってるー？襟についた髪の毛を他人に取られたら失恋するんだってよ！きゃはっ」

そう言つて来たのは狐城<sup>きつねしろ</sup>。手には私のものと思われる髪の毛を持っています、

私の襟にわざわざ落としてからとつて床に捨て、

手をハンカチでゆっくり拭いて笑いながら走り去って行った。

教室に入り席につく。

油断したとむしゃくしゃしていると比較的大人しい部類に入る向察<sup>きやうさつ</sup>が

不機嫌そうに近づいて来た。

「竜祖さん。私ね、幸真さんにシャーペン貰ったの。

シャーペン忘れて困つてたら『いいよ、いらないから』って。

幸真くんは皆に優しいんだから、勘違いしないで」

言うだけ言つとそそくさと去って行った。何なんだ。気にせず次のページをめくる。

ある日、学校の休み時間に小用（ただの雑談）

で初めて亜斗君に電話をかけたら彼は出なかった。

おかしいなと思つていたら、亜斗君から

『先輩、春日さんから聞いたんですが好きな人の事で悩んでるそうですね。

僕は僕の好きな人を頑張るんで、先輩はその人を頑張ったらいかがでしょう？』

と言うメールが来た。意味が分からずに首を傾げていると春日が近付いてきた。

「あのさ、亜斗から、

お前から電話かかってきて困ってるって電話かかってきたんだけど。

お前急に積極的になりすぎだよ。今まで電話した事無かっただろ？」

は？どう言うこと？月花は首を傾げた。

「ふーん、今まで電話しなかったから電話しちゃいけないんだ。初めて知った」

「それは…よく分からないよ。あのさ、あいつ連れてくるから待ってて」

「は？」

呆氣にとられていると、春日は妙に緊張顔の亜斗を引っ張って来た。

亜斗は複雑そうに言った。

「すみません先輩。」

電話に出なかったのは、これから好きな子を頑張るのに、他の女の人と電話するのは、好きな子に悪いと思っただんです」

多少違和感を感じたが、彼の、こう言う律儀な性格は知っていた。

「うん、それは分かるからいいよ？それに全然大した用じゃないし」

そついいつつも、月花は胸がむかむかして来た。

なら、さっきのメールは何なの？

普通はそつちをメールにするでしょうに。亜斗が再び口を開いた。

「先輩、すみませんが、

俺は俺の好きな子を頑張るから、先輩は静かに見守ってて欲しいです」

月花は亜斗と春日を交互に見つめながら眉をひそめた。どう言うこと？

「え？私、前に亜斗君に好きな子頑張れって言ったでしょ？何を謝るの？」

すると、亜斗がぺこつと頭を下げた。

「そうでしたっすみません、俺、前に先輩に

『その子が駄目になったら次は私とかどう？』

って言われたのが気になって、月花先輩に彼氏いるのか気になっ

て、

春日さんに聞いたんです。

あ。それはともかく先輩、変な事を言いましたすみません！」  
確かに、「冗談で（そりゃ、少しは下心あったかもしれないけど）  
そんな事を言った覚えがある。

「あはは、変に受け取れるような事言った私も悪いから、私もごめん」

月花は笑顔を作りながらも頭にきていた。

『いい子だな』からここまで発展するとは。勝手に発展させた奴がいるからだ。

笑いながら心の中で二人（特に春日）をにらみつけた。そう、そう言うこと。

恐らく春日は、亜斗君には私が亜斗君と憧れの人との間で悩んでる

：

みたいな事を言ったんだろう。春日の気持ちは知っている。

それに、と月花は思う。亜斗君も亜斗君よ。

亜斗の台詞を思い出して更に腹が立つ。自惚れもいいとこだわ。

おまけに何で私に彼氏がいるか気になるわけ？本当意味がわからない。

「あの男好きが」

私を睨み付け、わざと私に聞こえるように吐き捨てる小理影。おっかげ

あの男が私に何の怨みがあるか知らないが、ろくでもない糞幸真は、

自分に想いをよせるこれまたくでもない糞女達の嫉妬心を煽り、  
私にたきつけて楽しんでいるのだろう。今度近寄って来たら

「近づくな変態！」

と人前で大声で叫んでやる。

その時私は消しゴムを隣の机の下に落としてしまった。

席を立て膝をつき、手を延ばして消しゴムを取ろうとすると

私の後ろを誰かが走って通過した。

ただ通過したのではなくスカートを蹴飛ばされた。

腹が立ったので睨むようにそいつがいるであろう方を見ると奴妻E  
だった。

「あ、静刃ちゃんとかいかなくちや」

私を挟んで奴妻の反対側にいる静刃の名前を白々しく呼び、  
私が目に入っていないかのように私の背後を走り、

もう一度スカートを蹴飛ばして行く。流石に頭に来た。

「あー走って運動しなくちや」

奴妻の言葉を聞き、私はしめしめと心の中でほくそ笑んだ。

私は消しゴムを急いで取ると気付かれないよう髪の毛で顔を隠し、  
髪の間から横目で奴が走って来る時、

不自然にならないよう立ち上がるふりをして足を浮かせた。

ガタン！

盛大な音がした。足に少し衝撃を受けたがそれほど痛くない。

「きやああー!!」

奴妻の叫び声がした。私の狙いは外れなかった。

奴妻は勢いをつけていたので見事にすっころんだ。

ざまあ見る。

奴妻は泣き出した。鼻血が出ている。すると静刃達がすぐさま駆け  
寄って来た。

「奴妻、大丈夫？」

「痛いよ、痛い」

「ちよつと紗鶴、謝ったらどうなの？」

「はあ？」

私はわざと大声で言う。

「私こそ奴妻に足ふんずけられて痛いんだけど。むしろ謝ってほし  
いのはこっちだね」

「な、何言ってるの？」

「本当！むかつく！」

奴妻が静刃に乗じて叫ぶ。

「弁解するとね、私、前見ててあんたに気付かなかったの。

机と机の間に私がいてたださえ狭いのに、

わざわざ走って何度も往復するなんて、どんなバカ？

って思ったけどあんただったの。ごめん」

「…」

黙ったのを見て、私は演技が見破られて無いと確信する。

見破られるようなへまはしないが、もし見破られていたらこの糞女どもは

真つ先に「わざとやったでしょ！」と喚き出すだろうからだ。

なので私は安心して追い討ちをかける事にした。

「丁寧にスカートまで蹴ってくれてさあ。まあわざとなのは分かってるけど見てよ」

上履きで蹴られ白い跡がくつきりついたスカートを見せ付ける。

「クリーニング代頂戴、その鼻血ブルーさん。ねえ早くしてくんない？」

珍しく糞女どもは黙った。目配せをして

「奴妻、とりあえず保健室いこ」

と集団で保健室へ向かった。さて連中、次はどう出るかな？？

と悠長に思っているとしばらくして糞女達は先生を呼んで来た。

ろくでもないのが増えた…と思つてると案の定先生は私を怒り始めた。

奴妻の事は全て省略され「私がわざと奴妻を転ばせた」ことになっていた。

まあこれは正しいけど、連中は私が「本当にわざと」

転ばせた事は気づいていないので、

そこは伏せたまま最初から最後まできちんと説明した。

「…なので、謝ってほしいのはこっちです」

全て棒読みで言った。

「嘘です、先生。足跡は竜祖さんが奴妻さんを陥れる為にわざとつ

けたんです。

私達見てました、それに竜祖さんが奴妻さんをわざと転ばせるのも見ました」

口々に静刃達が言う。私は静刃達を睨みつけた。

私が奴妻を転ばせた現場にいた他の連中も奴妻の肩持ちだ。

「謝ってほしいのはこっちです。私の意見は変わりません」

「静刃達も他の連中もそう言ってるが？」

先生の言葉に私はもう呆れていた。

だが諦める事はしない。不利なのはいつもの事。

「謝ってほしいのはこっちです。私の意見は変わりません」

「いい加減にしたら？あんだ」

「謝ってほしいのはこっちです。私の意見は変わりません」

向こうが何か言う度にひたすら繰り返した。根負けしたのか奴妻が

「もういいよ、先生。もう大丈夫だし」

「いいって……」

「うん、そーそーじゃーね先生」

他の連中ももううんざりしたようで、何事も無かったかのように散った。

私は席について最後のページをめくった。

そこで月花は、この二人とのやりとりと同時に、

友人・先輩後輩関係も（心の中で）終わらせる事にした。

「何か、二人とも勘違いしてるんじゃない？」

私は年上好きだから、タメや年下にはそう言う意味では全く興味ないわ。

あ、私もう行くね！」

くるっと体を回転させると、その場を抜け出した。

以降、この二人となるべく顔を合わせたり口をきかないようにする事にした。

後悔は全く無い。

読み終わって気づかれないようにため息をつく。

不思議なのは、

私が他人を傷つけるとすぐにこうして不快な出来事が増えてしまうのに、

連中には起こらない事だ。

やれやれ、人をわざと傷つけた報いか。

そして連中と同じ事が起こらないのは、私が何一つ傷ついてないからに違いない。

## 大好きな兄姉

高校に入学してしばらくして、部屋でまた短編小説を読んでいた。「人々が追い詰めているのは、傷ついた天使」と言うフレーズに惹かれたのだ。

天使は必死に傷ついた羽を動かして飛んでいた。飛んでいると言っても、

人間の手が届かない位置を保つ事しか出来なかった。地面近くを滑空していると言った方がいいかもしれない。

乾いた血で、

小さい体を包んでいる長い裾の白い服が茶と白の服になりかけていた。

笑いと慈しみしか知らない少女の顔が苦痛と恐怖に歪んでいた。

大勢の足音、怒声が背後でして、天使は溜息をついた。

それは、先程よりかなり大きくなっていった。

天使は思わず後ろを振り返った。

武器を手にした大勢の人間が自分めがけ走っていた。

誰もが殺気をみなぎらせているのだと分かった。

不意に誰かに服を掴まれ、天使は地面に叩きつけられた。

服を掴んだのは中年の女だと分かった。

女は距離をとると手にした棒を振り上げた。

「やめろ！」

と天使は素早く立ち上がり叫んだ。

「私には心が無い！心あるお前達が触れる事は出来ぬ！」

天使は自分の言葉を聞いて、

自分がひどく取り乱しているのを悟り、ぞっとした。

女がびくつと怯んだ隙に、天使は夢中で飛び上がった。

「ああ、神様！お助け下さい！このままでは私は消えてしまいます！」



どうか私に助けを！仲間を寄越して下さいませ！！」

天使の目から涙が零れていた。

「どうして！どうしてこんな事に！！」

天使は錯乱しかけていた。

だがどんなに神に向かつて叫んでも何も起こらないのでふと我に返った。

どうして神は助けて下さらない？ようやく天使は理解した。

「お前達は私を裏切った！」

誰ともなしに叫んでから、天使は絶望にうちひしがれた。

体から細かい光の粉が舞い上がり、さらさらと流れて行く。

「体が！体が崩れて行く！」

天使はそう叫びながら消えた。

体ももはや跡形なく、服さえも何も残っていなかった。

読み終わってすぐ、ドアをノックする音がした。

「高校生になった感想はどう？」

姉が部屋に来て言った。兄は姉の後からついて来た。

「小中とほぼ同じ感じ」

社会人の兄（竜祖波天<sup>りゅうつそなてん</sup>）と、兄の一つ下で同じく社会人の姉（竜祖紗知香<sup>りゅうそさちか</sup>）は複雑そうに顔を見合わせた。

「またいじめられてるのか？」

「いじめって言うのかなあ。私は何とも思わないけど」

「相手の人数は？」

「さあ…名前も顔も覚えて無いから…とりあえず私以外の、先生含めた全員かな。」

小学校一緒の奴が中学校にいて、高校にもいてさ、相変わらず私がしてもいない事を言い触らしてろくでも無い者同士つるんで

色々言ってくるよ。あの人達、何であんな同じ事の繰り返ししかないんだろうね」

二人が溜息をついた。私はつくづく友人運が無いが、その反面家族運…

いや、兄妹運にはとても恵まれた。

「他人事みたいに言うんだな」

「だって、あんなのどうでもいいんだもん」

兄の左手の薬指にはめた指輪に目をとめた。

「兄ちゃん、話香わかさんと結婚するの？」

「そうなるだろうな」

礼鳥話香れいちゅうわかさんは兄ちゃんの彼女だ。

「姉ちゃんほつとは方土ほうとさんと？」

方土星壺ほうとせいちさんは姉ちゃんの彼氏だ。

「まだ分らないわ」

兄ちゃんの彼女も姉ちゃんの彼氏も

さすが二人が選んだだけあってとても優しくていい人だ。

「あのさあ、兄ちゃんと姉ちゃんには言うけど、

私、高校卒業したら行方不明になるつもりだから、幸せになってね、

幸せでいてね」

「何言ってるの！」

姉が泣きそうになりながら言う。

「何なのよ行方不明って！」

兄が姉を抑える動作をした。

「落ち着けよ」

私の方を向いた。

「どうして行方不明になりたい？」

「だって父さんも母さんも私が嫌いみたいだし、

何より兄ちゃんと姉ちゃんが出来が悪い妹なんて嫌だろうし…

未成年が失踪って色々面倒じゃん。私馬鹿じゃないし。

だから18になるまで…あと2年ちよつと我慢してね。

ちゃんと搜索願いとか出されないようにするから」

行方不明になる、と言ったのは、兄や姉を私から解放してあげたい

からだ。

社会人の兄と姉が一人暮らしをしないのは理由がある。

私には兄と姉しかないから、私を一人にしないようにしてくれているのだ。

一度兄が姉や私と3人で同居すると言った、

両親は激しく怒って結局話は流れてしまった。

そして家を離れるなら社会人だけにして私は置いていけと言ったのだ。

「馬鹿ね紗鶴、あんたは私にも兄さんにも愛されてるのよ。知らなかった？」

私は首を振った。

「まさか。そんなの分かってるよ」

そう、分かりすぎるくらい。

「もちろん父さんや母さんにもよ。変に気を遣う必要は無いの」

「姉ちゃんは優しいからそう言ってくれるけどさ、

父さんと母さんは私が嫌いだと思うなあ。

兄ちゃんや姉ちゃんと違って不良で問題児だし」

「こんな家族思いの優しい子が不良で問題児な訳無いでしょう？」

姉が頭を撫でてくれる。

「そう？でもね、私の方はあんましあの人達好きじゃないんだよ」

あの人達とは両親の事だ。

「あ、もちろんここまで育ててくれた恩は忘れてないから。

姉ちゃんがそう言うから…」

よくも私なんかを生んでくれたな、と言う憎しみがある事は誰にも言っていない。

本当、こんなろくでもないものを。

「覚えてる？私自殺未遂してさ、んで学校行きたくないって言ったじゃん？」

二人が複雑な表情で頷いた。結構本気で自殺するつもりだったけど、私は腑抜けなので死ぬのが怖くなったのだ。家族以外知らないから

いいけど。

「その上で今までされた事言っただのに

『そんな理由で休ませる訳にいかない』って行かせるし。

あの人達さあ、この前不登校の人達の特集見て何て言っただと思う？

『子どもが学校行きたくないなんて理由があるに決まってるのに、無理矢理行かせるなんて追い詰めるだけなのが分からないのか』だつてさ。

あんまりおかしくて久しぶりに大笑いしちゃった」

「…あんたが父さん母さんをあんまし好きになれないのも分かるけどね…」

姉が溜息をつく。ごめんね、姉ちゃん。

「確かに父さんも母さんも馬鹿だが」

兄が口を挟んだ。

「お前を嫌いな訳じゃないさ。世間体第一人間ってだけでな。

娘が不登校になったつつつたら外聞悪いから」

「うん、小学校の頃から分かってる。だから学校行くのが親孝行だと思っ事にした」

こんな事があつた。

仮病を使って学校行きたくないと言って、結局行かされて

（私にはサボりなんてしない。それほど馬鹿じゃない。行くからには行く）

そうしたら『あれ？いたんだ、全然気づかなかった』

と代わる代わる親切に言われた。遅刻して声をかけられる位なら、まだ普通に登校して無視された方がマシだ。親も安心するし一石二鳥だ。

「にしても何なんだろうな、そいつら。

お前が止めるから学校に言うのはやめたが…」

「いいよ。だって先生達は知っててあいつらの味方なんだし。

先生もあいつらも最初から敵だから、本当に何ともないよ。

ほんの少しだけ、親も先生も役立たずだと思っちゃうけど、

でも私はその親も先生も手に負えない変な奴だから仕方ないよ」最近、そう思うようになった。

「そんな訳無いでしょう!」

「そうだよ。馬鹿な事言うんじゃないやねえよ、こんなに可愛いのに」兄が頭を軽くこつんとした。

「そう? ありがと…」

私は体操座りをして膝に顔を埋めた。

「いいなあ兄ちゃんも姉ちゃんも他人を信用出来るんだもん…」

私は到底出来ないよ。バトロワ知ってるでしょ? あのゲームをクラスで…

うつん、多分学校全体でする事になっても私、普通に勝ち残れると思う」

私自身が腐っているのは十分承知しているが、

それでも『腐りきってる』訳ではないとも思う。兄と姉のお陰だ。

ちなみに自殺や他殺は眼中にほとんど無い。

特に他殺なんて、あんな連中の手で殺されるなんて考えただけでも汚い。

「まあでも仕方ないよね、いじめられた人は中々人を愛せないって言うし。」

そう言う系の感情、欠落してるのが分かるから、

でも兄ちゃんと姉ちゃんは別だよ、すごく好きだよ。

私、姉ちゃんみたいな親友と兄ちゃんみたいな彼氏欲しいなあ」

私は私以外の人間は嫌いだがこの兄と姉は違う。

兄と姉は私の一部だ。

## 安心出来る場所

大学の友人と待ち合わせをしている間、

『大事にされて』と言う、

ペットショップや保護されている動物達へのメッセージを綴った本を読んでいた。

若瀬果名は動物が大好きで、

高校の近くにある、小さなペットショップでアルバイトをしていた。

果名は働くのが楽しくてたまらなかった。

そして、店に新漣にいれんかすき一気

と言う男子小学生が毎日のように遊びに来るようになってから、果名の心は益々温かくなった。

少年は子犬や子猫、鳥の雛を手の平に乗せ、優しく撫でた。

果名は少年と動物達が特別な糸で結ばれているのを感じた。

ある日、一気が特別可愛がっていた子犬が、新しい飼い主の元へ行く日が近付いていた。

「この子、行き先が決まったの」

と、果名は優しく言った。

「でもこいつ、俺といたって言うてるんだ」

「私はすぐ分かったわ。この人の元なら、この子は絶対幸せだなってね」

「俺以上にいい飼い主なんかいないぞ」

と、一気は口を尖らす。

「本当だよ」

一気はぐつと何かを我慢するような表情をするルム（少年はそう呼んでいる）

の頭を撫でながら

「もう会えないよな」

と、呟いた。

「今までこの子を可愛がってくれてありがとうね」と、果名は辛い気持ちで告げた。

「他の子を可愛がって欲しいな」

「うん」

一気は素直にうなずいた。

「お前顔はいいし、愛想いいし、どこでも上手くやってけると思うけど」

ルムに向かい話しかける。

「元気でいるんだぞ」

ルムがじっと一気の顔を見つめる。ルムの目いっぱいに一気が映っている。

「たっくさん可愛がられるよ」

優しい気持ちになっていたその時。

「久しぶりい」

ポンツと誰かが肩を叩いてきた。

高校の時の私なら飛び上がって腕を払っただろうが、幸い大学ではよい友人に恵まれた。

自分で言うのもなんだが平和ボケしているのだ。

しかし意に反して、

肩を叩いて来たのは高校の同級生峰桜と澄乃<sup>すみの</sup>だった。

ここからろくでもない昔話が始まる。

「紗鶴さ、あの頃修我<sup>しゅうが</sup>くんが好きって事で有名だったよねー」

「そんな事あったかな」

ぶっきらぼうに答える。

本当は違う。私が修我に告白したただの変な噂を流したのは修我自身だ。

「そっじゃん、あの頃すごかったよねーでもフラれたよねー！」

「そっだったかな」

修我私にまとわりついて来た。誰かから聞いたがその様子はさながら

『振られた女をわざと構って遊んでいる』

ように見えていたらしい。無視せずに殴っておけばよかったか。そこへ運悪く待ち合わせをしていた友人瀬良森せらもりが来てしまった。

「お待たせ！…？」

瀬良森は二人を見て不思議そうに首を傾げた。峰桜と澄乃はお構い無しに喋り始めた。

「紗鶴ってあの頃服も顔もださかったよねー」

「うん、マジ引いてた。今はちよつと無理して頑張ってるー？」

と、私の服を見ながら言う澄乃。

自分で言うのもなんだが私は高校と比べて変わった。

「紗鶴さ、その顔整形したでしょ？全然違うもん」

峰桜がニヤニヤしながら聞いてくる。

瀬良森は二人のあまりの礼儀の無さに呆れて目を丸くしていた。

彼女はとても優しい。腐った連中の言葉を聞いて驚くのも無理はない。

高校の時の私なら無視したが、今は事情が違う。

「まさか。あんたじゃあるまいし」

峰桜は笑顔で言い返してきた私に驚いたようだった。

それにしても先程から私の話題しか出てない上にある事無い事好き放題だ。

腐っている人間の話題とは嫌な過去を持ち出して楽しむ事、

人を自分よりいかに下に見せるかなどろくでもない事だらけなのである。

「大学で紗鶴ってどんな感じなの？」

あろうことか瀬良森に聞いて来た。

私は瀬良森と腐った人間を喋らせなくなかったが我慢した。

瀬良森はにこにこしながら言う。

「紗鶴優しいですよ、友達多いし。」



軽音サークルのボーカルで、歌上手なんですよ！一部ファンクラブとか追っかけてきてるし」

「えっそうなの！？」

「マジありえないー」

峰桜と澄乃の態度が変わった。私はもう、こいつらとはこれまでだと思った。

「サークルを始めてから今までが信じられないぐらい友達が出来て、その友達と遊ぶのが楽しくて仕方ないんだよね」

友達、と堂々と言える事に密かに喜びを感じた。

「紗鶴、どうしたのー？ご機嫌ナナメ？」

心配そうな瀬良森に笑いかける。

「まさか。この人達さ、昔散々無視したり悪口言って来た人達なんだけどさ。」

何でまた近寄って来るのか気持ち悪くって。

しかも相変わらず根性腐ってて、どうしようもないんだよね」

「ね、早く遊びに行こうよ」

流石の瀬良森も状況を察したのだろう。

「うん、待たせてごめん」

さっさとその場を後にした。二人と離れてから瀬良森がぼそつと言った。

「紗鶴があんな事言うなんて、よっぽどだったんだろうね…」

そう言えば、紗鶴から過去の話聞いた事無いなあ」

「いいよ、思い出したくも無いし、話すほどの事はないから」

「そっか」

私と瀬良森は笑いあった。

私には、もう、安心出来る場所が出来たのだ……。

数十年後、私は過去を思い返しては文章にして、あるTVで何気なく聞こえた

「占いには、人々の思いが集結する」

の言葉にヒントを得て、

「他人占い」

と言う、短い一つの物語にした。

そして封筒に入れてそのまま忘れていた。

たまたま発見した孫がそれを渡してくれた。

普段あまり読書をしない孫に加え、夫が見せてくれと言っているので見せる事にした。

以下はその原稿であり、私の話しはこれで終わる。

高校が終わり、校門から出てくる二人がいた。

あまみすは えがわさと  
天海水羽と絵川聡梨だ。

「ねえねえ、他人占いって知ってる？」

「は？何それ？」

聡梨が切れ長の目を細め首を傾げた。

「何かね、自分以外の人の事を教えてくれる占い屋が出来たんだった！」

「ふーん、でも、他人の事を知って何か意味あるの？」

「あるよ。だって、芸能人とか直接面識無いじゃん。好きな人とか」

水羽は言って楽しそうに笑う。

「芸能人の事は正直当たってるかわかんないけどねー

他はよく当たってるって噂になってるんだよ。

過去とか、その人がある事についてどう思ってるかとか、

これからどう言う運命を辿るのか明らかになっちゃうんだって」

「成る程」

ほんの少し興味が出た。

「ねえ、聡梨ちゃん」

「何？」

「ほら」

と、水羽がたまたま自分達の前を歩いていたクラスメイトの後ろ姿

を指差した。

長い艶やかな黒髪が風になびいている。

その女、三田美衣緒みたひいおはモデルのように美しい顔をしており、

高校生と言うよりは大学生に見える大人びた雰囲気を持っていた。彼女については良い話を聞かない。

小学校の頃から気に入らない男の子どころか、

女の子まで叩き伏せていたそうだし（空手を習っているらしい）、他人と関わる事に興味が無いようで誰かと話しているところを見た事が無いし、

自分達含めたクラスメイトはおろか先生も怖がって彼女を避けていた。

「聡梨ちゃん？」

衣緒の事を考えていた聡梨は水羽の声で我に帰った。

「思ったんだけど、ね、試しにさ、三田美さんの事占ってみようよ」

「今の話しほんと？私も行きたーい」

急ぎ込んだように割って入って来たのはクラスメイトの月原夕砂つきはらゆうすな。

小柄で元気いっぱいの可愛らしい女の子だ。

「私もその占いすつごく興味あって、

行きたいなー行きたいなーって思ってたんだけど中々予定合う人いなくてさー

この先にあるんだってね」

「ふーん……」

聡梨は興味なさそうな返事をした。

そこまでして彼女の事を知りたいとは思わなかった。

かといって知りたくないわけでもないが。

「行くよね？」

水羽が確認するように聡梨を見る。

「うーん……」

「はい決定！」

夕砂が勇んで二人の手を引いて歩き出した。

三人は店へ向かった。

店は洋風の建築で、占い屋と言うより小さいお洒落な喫茶店のようなだった。

椅子に座って待っていると、背の低い女が奥から出て来た。

「いらっしやい…私が占い師のかじょうゆしか加上由子花よ」

彼女の歳は三十後半から四十後半だろうと聡梨は思った。

厚化粧の映える顔に艶やかな笑みを浮かべている。

「誰から始める？」

水羽が答える。

「あの、私、お願いします」

由子花はほほほ、と笑った。

「緊張なさないで」

「あの、私、クラスメイトの三田美衣緒さんについて教えて欲しいんです」

水羽の言葉に、彼女は頷いた。

「お安い御用よ」

「早く早くー」

夕砂の言葉を聞いて由子花は笑った。

「これから徐々に見て教えてあげるわ」

由子花は透明な、トランプに似たカードの束を取り出した。

よく見ると、白くうつすらと文字のようなものが浮かんでいる。

「さあ、三田美衣緒さんの何が知りたいのかしら？」

気がついたように一言つけ加えた。

「あなた達は三田美さんについてどれくらい知っているの？」

問いかけに、水羽と夕砂は衣緒について知っている限りの事を話す。聞き終わってから、由子花はカードを透かして、どこか遠くを見ながら何度も頷いた。

「本当、とても綺麗な子…それに優しい子ね。」

三田美さんの周りにいる誰よりも心が真っ直ぐで強いわ」

三人は目を見開いた。

「ええーっ本当ですかー？」

夕砂が声を上げる。

「ええ、事実よ…三田美さんは一人にいるのが好きなのね。とても落ち着くみたいなの」

「はい、いつもそうです」

頷く水羽に夕砂は

「誰かとあの人が喋っているとこ見た事無いしねー」と言った。由子花が続ける。

「ああ…それと、歌うのが好きね」

聡梨の顔に意外そうな表情が浮かび、少し身を前に乗り出した。

「そうなんですか？」

「三田美さんて友達いるんですか？」

夕砂の声が聡梨の声を押しつけてしまった。

由子花は目を細めて夕砂を見つめ、別のカードを取るとそれを見ながら口を開いた。

「三田美さんにはたった一人、心を許せる人がいるの。

それは家族でも、クラスメイトでもないわ」

「え！？男ですか？女ですか？」

と夕砂が素っ頓狂な声を上げた。

「年上の男性よ」

由子花は言つて、くすつと笑う。

「どんな人ですか？」

「背が高くて…空手を教えている。

彼も、とても強くて優しい心を持っているわ」

「空手道場の阿曾川あそがわさんだ！絶対そう！」

「うん！だね！」

夕砂と水羽が口々に言う。

「心のどこかで、ずっと誰かに助けてほしがっていたのを感じる…」

三田美さんに、色々な人が悪意に満ちた視線や言葉、暴力をぶつけて来る中、彼だけが優しくしてくれた、

話しをちゃんと聞いてくれたって思ってるのを強烈に感じるわ」  
それを聞いて、聡梨は思わず声を出していた。

「三田美さんは、道場の人の他に友達欲しいって思ってるんですか？」

言ってしまった後、表に出さないよう努めつつびくりしていた。

自分は彼女と友達になりたいようではないか。

「彼女は、本当は、彼とだけではなくて、色々な人ととても話したいの」

由子花は聡梨に優しく言って、また別のカードを手取る。

「でも、話せない…？」

首を傾げ、しばらくカードを見つめた。

「いいえ、話せないのではなく、話さないのね。」

いつかはあなた達と対等な立場に立てるだろうと思ってるけど、まだ時期じゃないと思ってるわ。

それに彼女、誰もが弱いものを襲う本能があるのを理解しているから…」

自分を戒めて、わざと今の状況に甘んじているの」

「それって、わざと自分を犠牲にしてるってことですか？どうしてですか？」

今度は水羽が首を傾げる。由子花は意識を集中し、

「今はもう、ほぼ手の尽くしようが無いのを感じ取っている。」

本気を出せば改善出来ない事は無いのだけれど、彼女はそれに魅力を全く感じないみたいね」

「犠牲なんて、誰も頼んで無いじゃん。ま、本人が納得してるなら、しかたないよね」

と、夕砂。

「彼女は疲れている。長い間、根も葉も無い噂を流したり、

彼女を語って予定を変更したりしては、

周囲を不審に思わせる心無い人達に囲まれて神経を擦り減らしているから」

「疲れてる…？」

彼女が、疲れている？とてもそうは見えないけど。

と、聡里は軽く肩を竦めた。由子花が次のカードを引く。

突然、水羽が声を上げた。

「三田美さん、いつも、何を考えているのかわかります？」

「今の彼女は、とても苦しんでいる。」

でも、色々な思いに蓋をしているせいで、自分が何故苦しいのか分かってないの。

今はただ、死にたい。けれど自分は臆病で自殺出来ない。

殺して欲しい。誰か殺してくれないか。一瞬がいい。それだけなの。由子花の言葉の後、聡梨は何となく、中途半端な質問をするのははばかられて黙っていた。

「え、ええと…これからの三田美さんの運命って、どんな感じなんですか？」

ぼんやりとした表情を浮かべていた水羽が、戸惑いがちに聞く。

「彼女の運命は、高校を卒業してから大きく変わるわ。よい方も、悪い方も」

首を傾げながら、再び水羽は聞いてみた。

「悪い方って？」

「元々、長生き出来ない運命にある子なの」

「えっ」

「何で？」

夕砂は不審そうな表情を浮かべた。

「この子、自分からではないけれど、よく喧嘩をするでしょう？」

「うん、そう言う噂」

「本能的で、長く生きられない事を悟ってるわ。だから、余計に動き回りたいのね」

所詮は占い。

本当の事ではないかもしれないにしろ、聡梨の胸に、同情のような感情が込み上げて来た。

どうしたらいいんだろう、自分が出る範囲で助かるなら、助けてあげたい。気持ちだけでも。ここへ来る途中、すれ違った彼女の背中を思い出した。

次の日の朝、聡梨は水羽と共に、不良三人を軽々とのした衣緒を見つけた。

三人は悪態をつきながら逃げて行く。

「すごいわ、信じられない」

と、聡梨。

「本当、強いよね」

と、水羽が手を叩きそうな勢いで言った。

声が聞こえたのか、彼女と目が合った。

その目は虚ろで、確かに『死にたい』と言っているように見えた。

「あつ聡梨と水羽！」

二人の後ろから、夕砂が彼氏と歩いて来て、立ち止まっている二人に手を振ってすれ違う。

「今なら、自殺したい人が喜びそうなサイト、沢山あるのになあ」

小さくない声で、こう言ってるのが聞こえた。

「は？いきなり何言ってるんだお前？」

「べつつにー」

夕砂は横目で、衣緒を見遣りながら通り過ぎる。

「この前例の占い屋で、ある人の事を占ってもらったの。」

で。その人今すつごく死にたがってるらしくって。

占い師が言うには運命の別れ道の日が迫ってるって。今の辛さに負けて死ぬか、考え直すか。

生きてれば、運命が好転して楽しくなるのに、馬鹿だよな。

どっちみち長生きは出来ないみたいなんだけどー」

へえ、と彼氏はたいした関心も無さそうに呟いた。

聡梨と水羽が衣緒を見ると、彼女は、夕砂と彼女の彼氏が立ち去った方を向いていた。

「ねえ」



と、水羽が勇気を出して衣緒に近づいて、少々びくつきながら話しかけた。

「今、辛い？」

衣緒が振り返る。

「怪我なら、無いけど……？」

と衣緒は、用心深そうに水羽を見ながら言う。

聞き慣れた声ではなかったが、思っていたよりずっと柔らかい。聡梨が口を挟む。

「見ていたからわかるわ。そうじゃなくて、変なこと、言うけど三田美さんは、

人に涙を見せられる状況では無い……と勝手に思ったの」

言いながら、何で緊張してるの私、と心の中でごちた。

衣緒は、困惑した様子で、二人を見下ろした。

「よく分からない……けど……？ありがとう。私、学校に行くわ」

言って、彼女は目を細めて、坂の上にある学校を見上げ、坂を登り始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6606c/>

---

気だるい毎日

2010年10月8日21時42分発行